

共古日録

二十五



Handwritten Japanese calligraphy in cursive style, including the characters '東京' (Tokyo) and '中野' (Nakano).

特別
15
1413
27



共古日録 二十五

日暮里
寺の
金口



志保覚會、日暮里本行寺蔵なる太田為灌平河番評
堂一冊、銀口出呂せり形左の略用の如く、大々昔に刻あり
普通銀口の形と

異なり口の刻

北より耳を

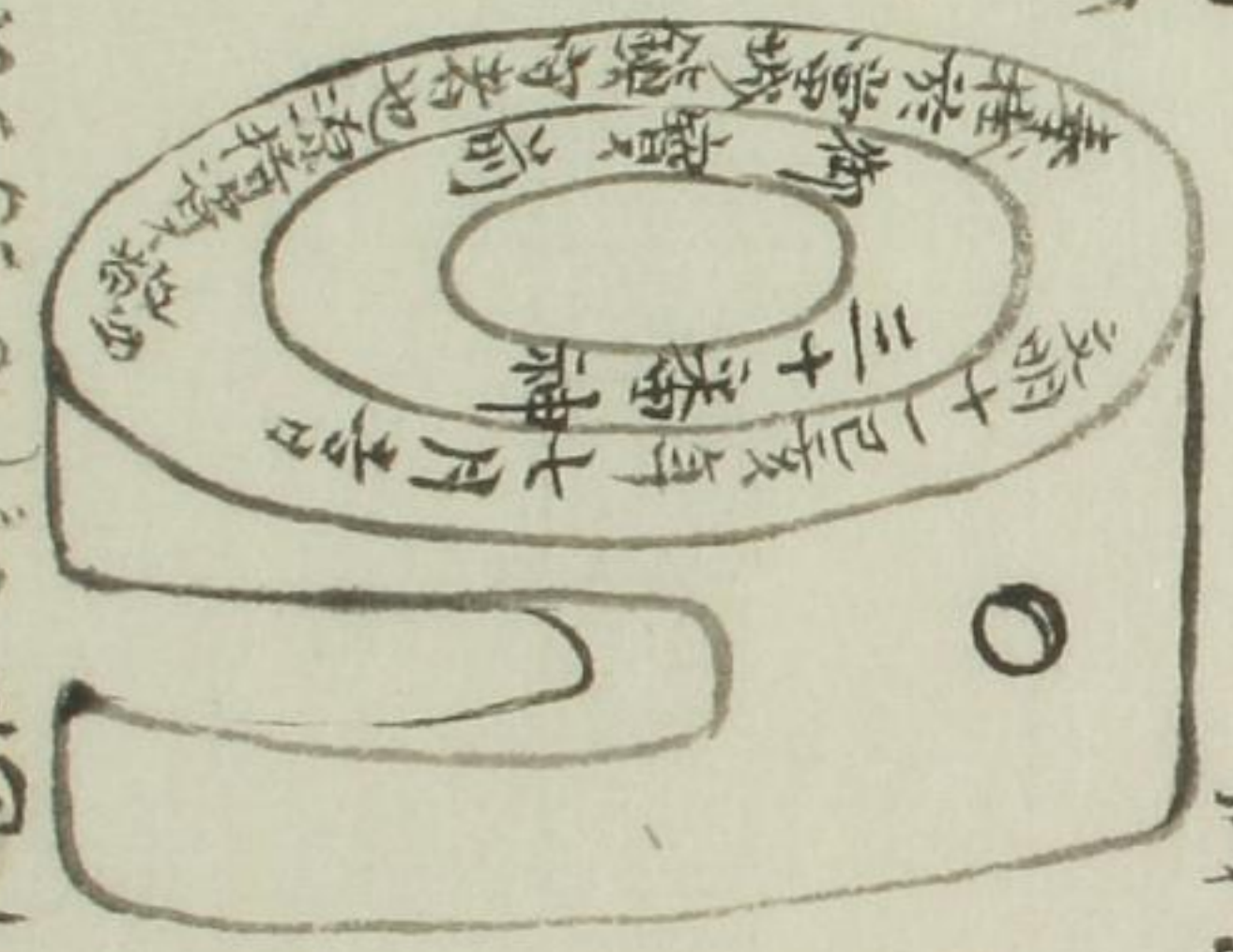
細通しの元あり

鑄物と見え

お姑なき

と見え

此の鑄物、明治二十九年子の年...



裏銘

關東靜謐君臣合斬武運
長久諸願成就強敵退散
註

香林堂、平河の今の丸の
池に在りしと本行寺の
縁起云々



時代の書きなりが、書政の強弱、迷信の及ぶを、珠、信せられた
ね及ぶ道、藩り、諸々、連ね、書、信、堂、城、く、このころ
の、思、い、ぬ、こ、ろ、強、の、比、り、の、あ、る、又、形、式、決、て
、時代の、然、つ、に、あ、る、を、勿、論、電、氣、の、形、の、如、物、
、又、形、ま、た、の、縁、ち、な、し、う、い、あ、る、を、令、く、必、ず、別、る、耳、也、
、ち、な、し、を、信、は、な、ら、ず、あ、る、を、以、て、古、物、と、他、り、ち、
、せ、し、し、見、ゆ、總、て、は、夕、及、の、世、の、金、も、う、古、物、多、く、
、何、れ、の、如、き、お、も、い、あ、る、と、い、ひ、し、の、ち、は、後、世、の、古、物、の、後、
、研、究、の、前、の、研、究、の、古、物、簡、に、強、耶、の、敏、考、の、数、あ、る、あ、ら、
、考、の、金、つ、に、其、中、の、一、か、つ、く、さ、の、ち、は、亦、の、現、在、の、もの、と、い、
、真、の、古、物、の、成、る、考、の、運、速、の、鐘、も、ま、た、信、に、あ、る、と、い、ふ、は、な、ら、ず、

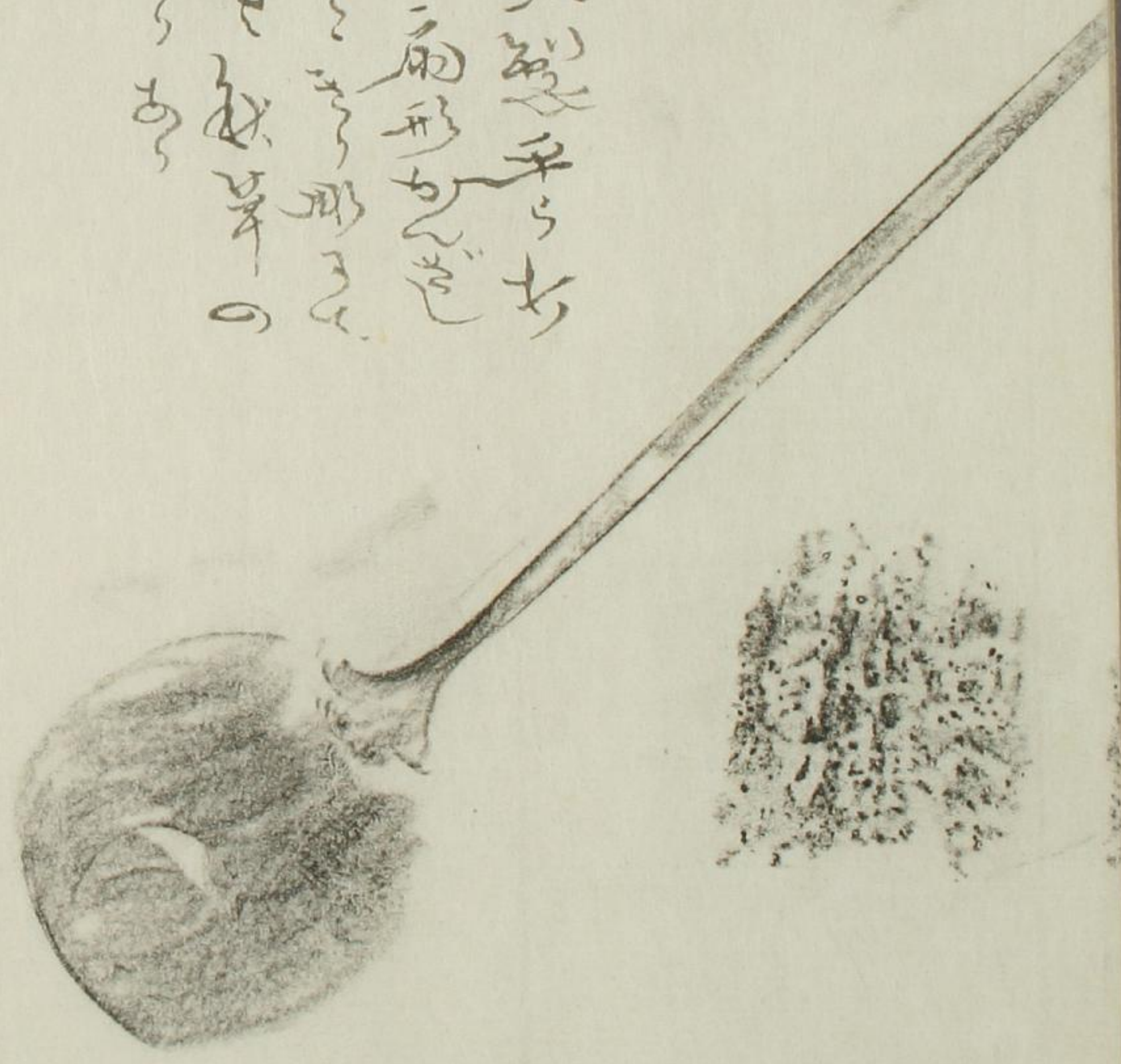
宗教的なる
が、迷信

迷信の一種、数あるもの、宗教的なる、
、火、の、魚、の、如、く、一、震、動、し、雷、が、電、雷、と、言、ふ、電、二、日、
、此、け、り、蛇、の、ま、上、し、狐、狸、の、女、よ、に、け、環、貝、也、中、は、千、年、た、り、
、一、山、を、削、り、お、け、お、て、天、に、す、と、信、じ、狐、火、河、童、鐘、麴、有、
、い、の、は、在、天、如、山、の、如、く、在、数、を、身、に、う、か、幾、十、も、や、も、う、の、
、ら、ず、其、考、の、り、に、珊瑚、珠、の、毒、薬、に、弱、き、珠、割、れ、の、如、き、
、食、わ、な、ら、ず、毒、の、入、り、し、と、い、ふ、は、一、足、と、い、ふ、珊瑚、の、珠、を、
、に、必、用、な、ら、ず、と、信、じ、昔、今、を、考、し、て、その、場、に、あ、る、熱、を、
、て、火、割、り、の、如、く、お、も、い、あ、る、と、い、ふ、又、蘇、人、の、こ、ろ、の、聲、の、あ、る、
、考、の、聲、が、枝、の、如、く、ま、る、を、考、し、弱、の、考、を、い、ふ、は、な、ら、ず、

昔は、老妓あり、ゆづり、名を賣
し、老妓の今、多し、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

老妓の活

銀製平ら
田角形
かき形
母
の



弘前猪帯の
鉄板すし形

廿八日造 施主 砂彌宗海
 幸如の臣をりしりしと
 今も年表りの也

鉄板猪帯板



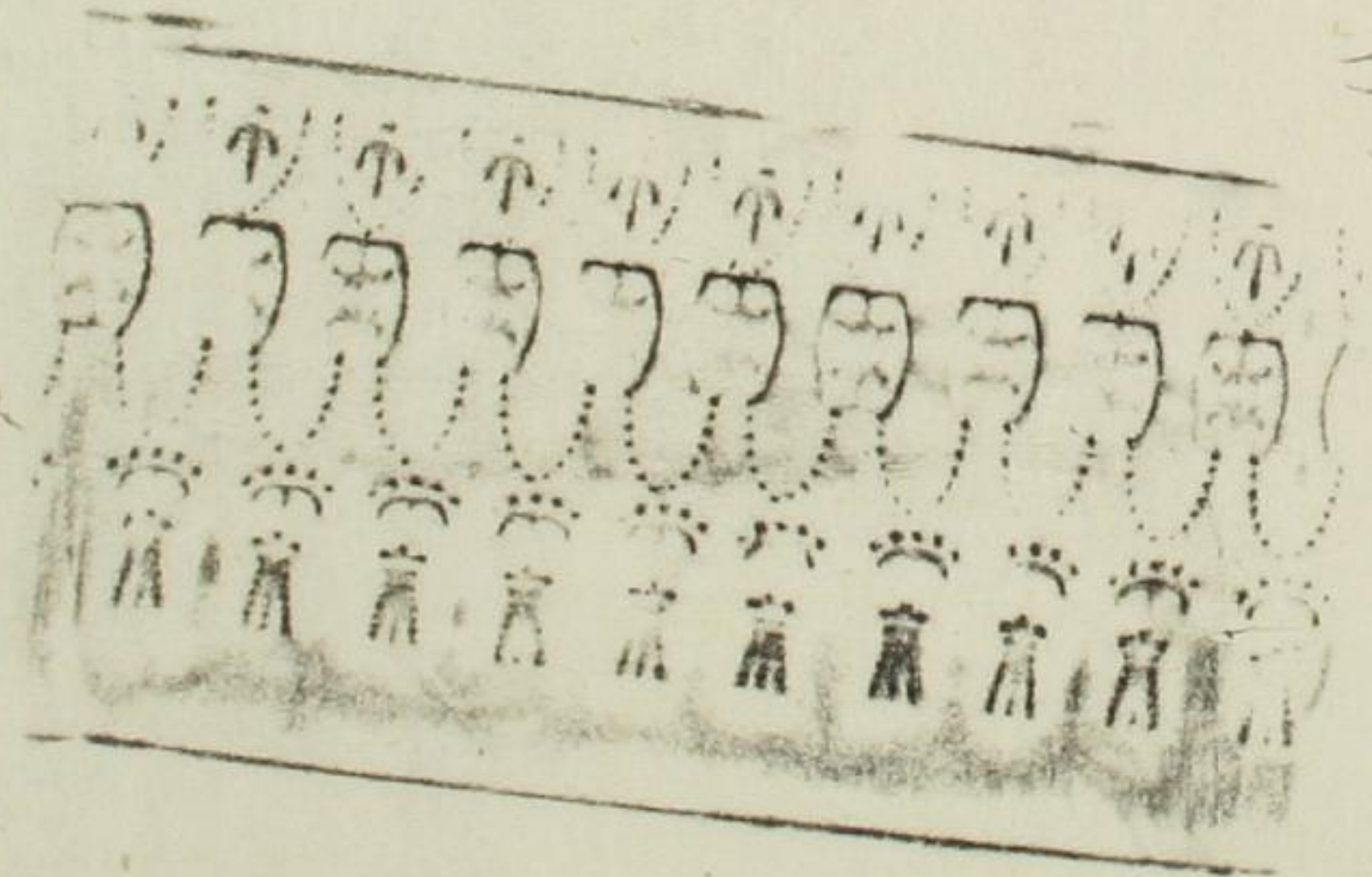
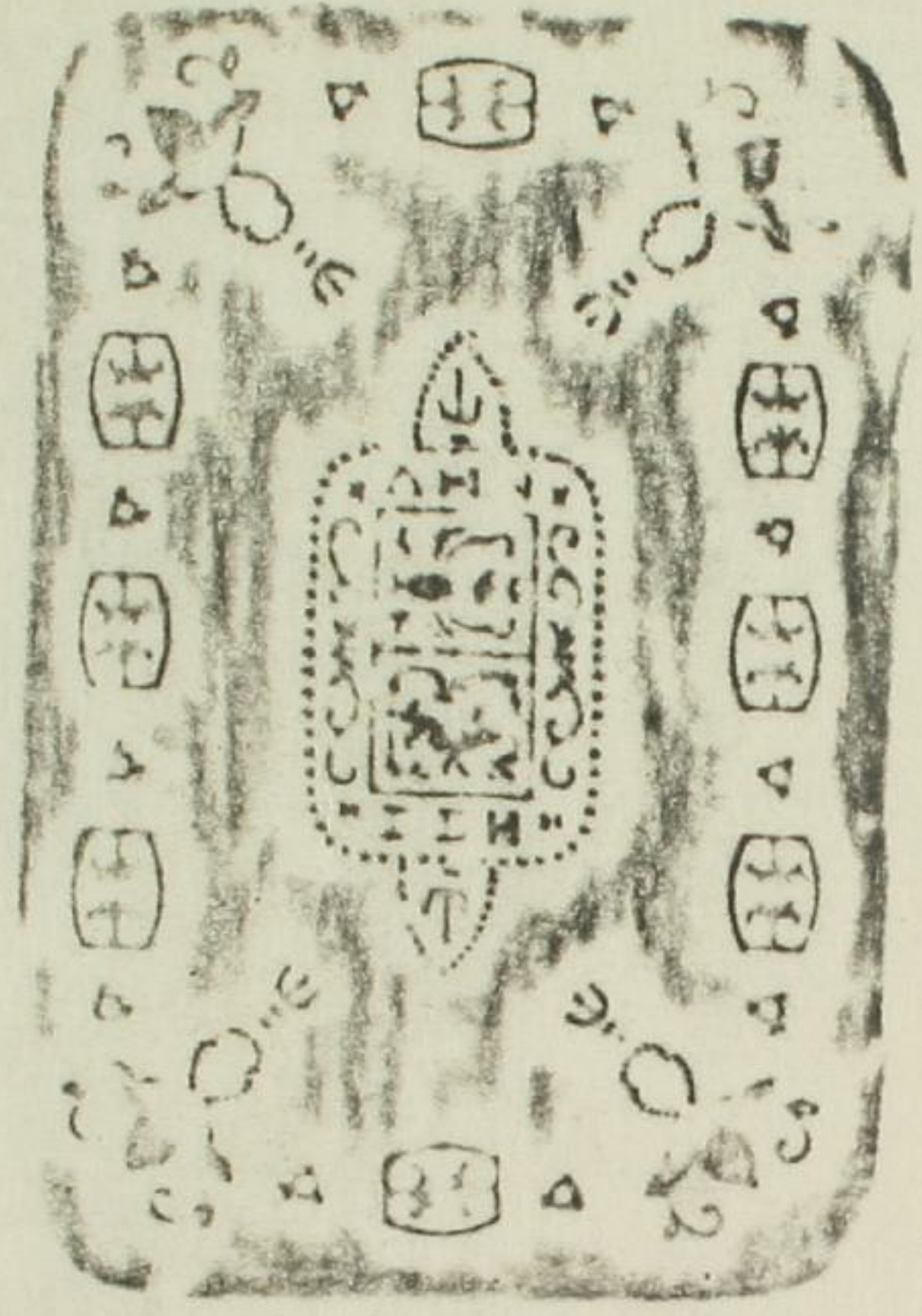
速文也

有

和者弘前をて用せし猪帯の原板なりしなり

モール模様の
金及び銀の
形及び造り

モール模様鉄板製解當り



急如の臣をりしりしと
 今も年表りの也

五重
ののね

Handwritten musical notation consisting of a series of circles and lines, organized into a grid.

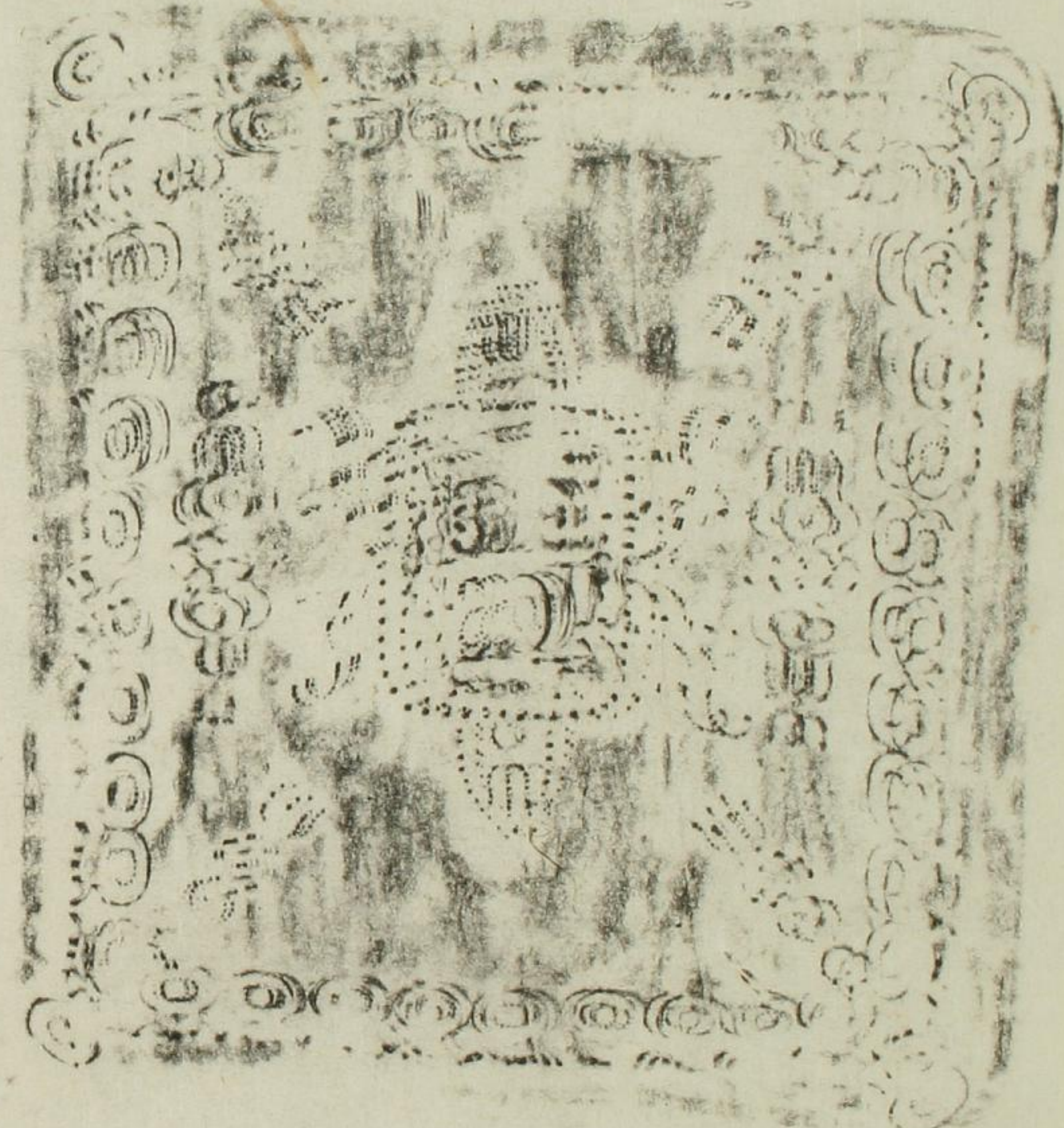
Handwritten musical notation consisting of a series of circles and lines, organized into a grid.

Handwritten musical notation consisting of a series of circles and lines, organized into a grid.

Handwritten musical notation consisting of a series of circles and lines, organized into a grid.

Handwritten characters at the bottom of the page, possibly a signature or a note.

前
ののね
ののね
ののね



前
ののね
ののね
ののね

昔も黄銀製の京都細工のやうな平船の慶長以前のもの
表のものはしほりて今も今もこのころにわたりの
あしやうの細工のやうなものでブリキ茶入の同の
ちの細工のやうなものでの何れも京都のやうなもので
おとこもブリキが約半は始は其の板の火箱
の内箱製のものがあつたり江戸のやうな知れぬ用
せももあつたりのもあつたり如く慶長の麴所元空前某
舞臺のやうな細工のブリキの表の金具式をひり
ブリキのやうなものを置き置きと置くの目立ちをたつた
かつた細工のやうな重なるものやうな青年のやうな使物な
かつた出で用ひものなす

かたがた

日縁のやうな武蔵屋中の女の鳥籠のものをいせ
鳥籠のものをいせ知れぬやうな細工の
知れぬやうな細工のやうな細工のやうな細工のやうな
のやうな細工のやうな細工のやうな細工のやうな細工のやうな
甘きあつたりがやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな
雨の心算のやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな
と書かうなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな
疎つて大騒ぎを成りつた話のやうな細工のやうな細工のやうな
許すやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな
あつたりやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな

一林が志あるやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな
とあり又本朝の細工のやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな

乙卯子に被言の祭礼に當りては
 多し其の儀に遊年移住の儀道が都鄙に
 被言の類々多し其の儀に遊年移住の儀道が都鄙に
 好むに何なる母者の聲を以てて其の儀に遊年移住の儀道が都鄙に
 三田十三の寺にありて其の儀に遊年移住の儀道が都鄙に
 幸甚と云ふ所のありて其の儀に遊年移住の儀道が都鄙に
 此の鳥扇の由緒は此の鳥扇の由緒は此の鳥扇の由緒は
 此の鳥扇の由緒は此の鳥扇の由緒は此の鳥扇の由緒は

甲斐上野原
 百八

蜀と世伝

官幣小社大國魂神社李子祭の起原

并に鳥扇の由緒

李 子 祭

○李子祭は 天下泰平五穀成就を目的とするは勿論なれど、其の起原は、源頼義義家父子が、奥州の安部氏一族を征伐せられし、即ち前九年の役を記念する祭典なり。當社の傳記に「永承六年辛卯六月、陸奥の國人、安部頼時、其子貞任、朝廷に叛奉りしかば、源頼義朝臣鎮守府將軍に任じ、追討の宣旨を蒙り、其息義家朝臣と共に、任國へ發向せられし時、道を茲に取り、即ち當社に参籠して、賊徒誅伏の折誓あり云々。康平六年歸京の時、また當社に参詣ありて、苗木千株を植る、其の宿願を果されき云々。毎年六月二十日（太陽曆日に改めし）ため七月二十日となるの神事は、此の朝臣の命せられし例なりとぞ」とあり。さて此の祭典を、李子祭と稱するは、此の古例の供饌として、李子、栗飯等を獻するがためなり。按ずるに、古例の起原は、今詳ならずれども、頼家父子宿願成就のため、報賽の神事を行はれし際、此の李子を獻供せられしより起りしものなるべし。當日獻供せし、李子又は栗飯を受けて食するときは、必ず食傷又は諸病等にかゝる憂なしと、近郷より群集する男女數萬に及ぶ。

烏 扇

○烏扇のことは、古語拾遺と云ふ古き書に、「神代の昔、大地主神、田を作り給ふ時、其の田作る人に、牛肉を饗せられしに、恰も御歳神の御子、其處に來りまして之を御覽せられ、還りて其の狀を御父に告げ給へり、御歳神之を聞きたまひ、大に怒りまして、其の田に蝗を多く放たれければ、苗葉忽ち枯損して、恰も篠竹の如くなりき。是に於いて、大地主神、巫者をして其の由を占はしめたまひしに、御歳神の御祟をなしたまふなり。宜しく白猪、白馬、白鶏を獻じて、其の御怒を解くべしとありければ、直に御教の如くして奉謝し給ひしに、御歳神、再び御の蝗を除く方法を傳へられたり。其の方法中に、烏扇を以ちて之を扇げと仰せたまひしことあり。是れ即ち烏扇の起原とする所なり。抑も當社が、李子祭の當日、此の烏扇を参拜者に授與し始めしは、其の年代を詳にせずと雖も、決して近代の事にはあらざるなり。さて田畑にある農作物が、一朝虫害を蒙りたる時、此の烏扇を以つて扇げば、虫害立どころに去り、又病者あるとき、之を以つて扇げば、諸病直に平癒すと云ふ。故に當日は、李子、烏扇を神社より授與する外に、又境内に之を販賣する商店多く出で、さすがに廣大なる境内も、此の二品を以て埋められ、殆ど立錫の地なきに至る。神徳實に偉大なりと謂ふべし。

武藏國府中町 官幣小社大國魂神社々務所謹言

七月二十日

甲斐
乙斐
丙斐
丁斐

る八號の... 甲斐の... 乙斐の... 丙斐の... 丁斐の...
 八月廿一日... 八月廿二日... 八月廿三日...
 八月廿四日... 八月廿五日... 八月廿六日...
 八月廿七日... 八月廿八日... 八月廿九日...
 八月三十日... 九月一日... 九月二日...
 九月三日... 九月四日... 九月五日...
 九月六日... 九月七日... 九月八日...
 九月九日... 九月十日... 九月十一日...
 九月十二日... 九月十三日... 九月十四日...
 九月十五日... 九月十六日... 九月十七日...
 九月十八日... 九月十九日... 九月二十日...
 九月二十一日... 九月二十二日... 九月二十三日...
 九月二十四日... 九月二十五日... 九月二十六日...
 九月二十七日... 九月二十八日... 九月二十九日...
 九月三十日... 十月一日... 十月二日...
 十月三日... 十月四日... 十月五日...
 十月六日... 十月七日... 十月八日...
 十月九日... 十月十日... 十月十一日...
 十月十二日... 十月十三日... 十月十四日...
 十月十五日... 十月十六日... 十月十七日...
 十月十八日... 十月十九日... 十月二十日...
 十月二十一日... 十月二十二日... 十月二十三日...
 十月二十四日... 十月二十五日... 十月二十六日...
 十月二十七日... 十月二十八日... 十月二十九日...
 十月三十日... 十一月一日... 十一月二日...
 十一月三日... 十一月四日... 十一月五日...
 十一月六日... 十一月七日... 十一月八日...
 十一月九日... 十一月十日... 十一月十一日...
 十一月十二日... 十一月十三日... 十一月十四日...
 十一月十五日... 十一月十六日... 十一月十七日...
 十一月十八日... 十一月十九日... 十一月二十日...
 十一月二十一日... 十一月二十二日... 十一月二十三日...
 十一月二十四日... 十一月二十五日... 十一月二十六日...
 十一月二十七日... 十一月二十八日... 十一月二十九日...
 十一月三十日... 十二月一日... 十二月二日...
 十二月三日... 十二月四日... 十二月五日...
 十二月六日... 十二月七日... 十二月八日...
 十二月九日... 十二月十日... 十二月十一日...
 十二月十二日... 十二月十三日... 十二月十四日...
 十二月十五日... 十二月十六日... 十二月十七日...
 十二月十八日... 十二月十九日... 十二月二十日...
 十二月二十一日... 十二月二十二日... 十二月二十三日...
 十二月二十四日... 十二月二十五日... 十二月二十六日...
 十二月二十七日... 十二月二十八日... 十二月二十九日...
 十二月三十日... 一月一日... 一月二日...
 一月三日... 一月四日... 一月五日...
 一月六日... 一月七日... 一月八日...
 一月九日... 一月十日... 一月十一日...
 一月十二日... 一月十三日... 一月十四日...
 一月十五日... 一月十六日... 一月十七日...
 一月十八日... 一月十九日... 一月二十日...
 一月二十一日... 一月二十二日... 一月二十三日...
 一月二十四日... 一月二十五日... 一月二十六日...
 一月二十七日... 一月二十八日... 一月二十九日...
 一月三十日... 二月一日... 二月二日...
 二月三日... 二月四日... 二月五日...
 二月六日... 二月七日... 二月八日...
 二月九日... 二月十日... 二月十一日...
 二月十二日... 二月十三日... 二月十四日...
 二月十五日... 二月十六日... 二月十七日...
 二月十八日... 二月十九日... 二月二十日...
 二月二十一日... 二月二十二日... 二月二十三日...
 二月二十四日... 二月二十五日... 二月二十六日...
 二月二十七日... 二月二十八日... 二月二十九日...
 二月三十日... 三月一日... 三月二日...
 三月三日... 三月四日... 三月五日...
 三月六日... 三月七日... 三月八日...
 三月九日... 三月十日... 三月十一日...
 三月十二日... 三月十三日... 三月十四日...
 三月十五日... 三月十六日... 三月十七日...
 三月十八日... 三月十九日... 三月二十日...
 三月二十一日... 三月二十二日... 三月二十三日...
 三月二十四日... 三月二十五日... 三月二十六日...
 三月二十七日... 三月二十八日... 三月二十九日...
 三月三十日... 四月一日... 四月二日...
 四月三日... 四月四日... 四月五日...
 四月六日... 四月七日... 四月八日...
 四月九日... 四月十日... 四月十一日...
 四月十二日... 四月十三日... 四月十四日...
 四月十五日... 四月十六日... 四月十七日...
 四月十八日... 四月十九日... 四月二十日...
 四月二十一日... 四月二十二日... 四月二十三日...
 四月二十四日... 四月二十五日... 四月二十六日...
 四月二十七日... 四月二十八日... 四月二十九日...
 四月三十日... 五月一日... 五月二日...
 五月三日... 五月四日... 五月五日...
 五月六日... 五月七日... 五月八日...
 五月九日... 五月十日... 五月十一日...
 五月十二日... 五月十三日... 五月十四日...
 五月十五日... 五月十六日... 五月十七日...
 五月十八日... 五月十九日... 五月二十日...
 五月二十一日... 五月二十二日... 五月二十三日...
 五月二十四日... 五月二十五日... 五月二十六日...
 五月二十七日... 五月二十八日... 五月二十九日...
 五月三十日... 六月一日... 六月二日...
 六月三日... 六月四日... 六月五日...
 六月六日... 六月七日... 六月八日...
 六月九日... 六月十日... 六月十一日...
 六月十二日... 六月十三日... 六月十四日...
 六月十五日... 六月十六日... 六月十七日...
 六月十八日... 六月十九日... 六月二十日...
 六月二十一日... 六月二十二日... 六月二十三日...
 六月二十四日... 六月二十五日... 六月二十六日...
 六月二十七日... 六月二十八日... 六月二十九日...
 六月三十日... 七月一日... 七月二日...
 七月三日... 七月四日... 七月五日...
 七月六日... 七月七日... 七月八日...
 七月九日... 七月十日... 七月十一日...
 七月十二日... 七月十三日... 七月十四日...
 七月十五日... 七月十六日... 七月十七日...
 七月十八日... 七月十九日... 七月二十日...
 七月二十一日... 七月二十二日... 七月二十三日...
 七月二十四日... 七月二十五日... 七月二十六日...
 七月二十七日... 七月二十八日... 七月二十九日...
 七月三十日... 八月一日... 八月二日...
 八月三日... 八月四日... 八月五日...
 八月六日... 八月七日... 八月八日...
 八月九日... 八月十日... 八月十一日...
 八月十二日... 八月十三日... 八月十四日...
 八月十五日... 八月十六日... 八月十七日...
 八月十八日... 八月十九日... 八月二十日...
 八月二十一日... 八月二十二日... 八月二十三日...
 八月二十四日... 八月二十五日... 八月二十六日...
 八月二十七日... 八月二十八日... 八月二十九日...
 八月三十日... 八月三十一日... 九月一日...
 九月二日... 九月三日... 九月四日...
 九月五日... 九月六日... 九月七日...
 九月八日... 九月九日... 九月十日...
 九月十一日... 九月十二日... 九月十三日...
 九月十四日... 九月十五日... 九月十六日...
 九月十七日... 九月十八日... 九月十九日...
 九月二十日... 九月二十一日... 九月二十二日...
 九月二十三日... 九月二十四日... 九月二十五日...
 九月二十六日... 九月二十七日... 九月二十八日...
 九月二十九日... 九月三十日... 十月一日...
 十月二日... 十月三日... 十月四日...
 十月五日... 十月六日... 十月七日...
 十月八日... 十月九日... 十月十日...
 十月十一日... 十月十二日... 十月十三日...
 十月十四日... 十月十五日... 十月十六日...
 十月十七日... 十月十八日... 十月十九日...
 十月二十日... 十月二十一日... 十月二十二日...
 十月二十三日... 十月二十四日... 十月二十五日...
 十月二十六日... 十月二十七日... 十月二十八日...
 十月二十九日... 十月三十日... 十月三十一日...
 十一月一日... 十一月二日... 十一月三日...
 十一月四日... 十一月五日... 十一月六日...
 十一月七日... 十一月八日... 十一月九日...
 十一月十日... 十一月十一日... 十一月十二日...
 十一月十三日... 十一月十四日... 十一月十五日...
 十一月十六日... 十一月十七日... 十一月十八日...
 十一月十九日... 十一月二十日... 十一月二十一日...
 十一月二十二日... 十一月二十三日... 十一月二十四日...
 十一月二十五日... 十一月二十六日... 十一月二十七日...
 十一月二十八日... 十一月二十九日... 十一月三十日...
 十二月一日... 十二月二日... 十二月三日...
 十二月四日... 十二月五日... 十二月六日...
 十二月七日... 十二月八日... 十二月九日...
 十二月十日... 十二月十一日... 十二月十二日...
 十二月十三日... 十二月十四日... 十二月十五日...
 十二月十六日... 十二月十七日... 十二月十八日...
 十二月十九日... 十二月二十日... 十二月二十一日...
 十二月二十二日... 十二月二十三日... 十二月二十四日...
 十二月二十五日... 十二月二十六日... 十二月二十七日...
 十二月二十八日... 十二月二十九日... 十二月三十日...

る八院の... 甲斐の... 官幣小社大國魂神社々務所謹言

○鳥扇のことは、古語拾遺と云ふ古き書に、「神代の昔、大地主神、田を作り給ふ時、其の田作る人に、牛肉を饗せられしに、恰も御歳神の御子、其處に來りまして之を御覽せられ、還りて其の状を御父に告げ給へり、御歳神之を聞きたまひ、大に怒りまして、其の田に蝗を多く放たれければ、苗葉忽ち枯損して、恰も篠竹の如くなりき。是に於いて、大地主神、巫者をして其の由を占はしめたまひしに、御歳神の御祟をなしたまふなり。宜しく白猪、白馬、白鶏を獻じて、其の御怒を解くべしとありければ、直に御教の如くして奉謝し給ひしに、御歳神、再び御の蝗を除く方法を傳へられたり。其の方法中に、鳥扇を以ちて之を扇げと仰せたまひしことあり。是れ即ち鳥扇の起原とする所なり。抑も當社が、李子祭の當日、此の鳥扇を参拜者に授與し始めしは、其の年代を詳にせずとも、決して近代の事にはあらざるなり。さて田畑にある農作物が、一朝虫害を蒙りたる時、此の鳥扇を以つて扇げば、虫害立どころに去り、又病者あるとき、之を以つて扇げば、諸病直に平癒すと云ふ。故に當日は、李子、鳥扇を神社より授與する外に、又境内に之を販賣する商店多く出で、さすがに廣大なる境内も、此の二品を以て埋められ、殆ど立錫の地なきに至る。神徳實に偉大なりと謂ふべし。

武藏國府中町
官幣小社大國魂神社々務所謹言

七月二十日

向ふ雲の四八幡
聖物中の龍
文鏡といふ

心ゆくお返しに... 聖物の龍
文鏡といふ
同前所出の文鏡
同前所出の文鏡
同前所出の文鏡

向後今津の
荒神の
供奉

向後今津の
荒神の
供奉
向後今津の
荒神の
供奉

豆蔵の
文籍あり

豆蔵の
文籍あり
豆蔵の
文籍あり
豆蔵の
文籍あり

治水の切あり
神々々々

神戸の北隣
世の村
牡牛の飼

豊即漢河村の古湖のありしに
今村奉祀を蔵
日大明神の村の古湖のありしに
今村奉祀を蔵
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼

神々々々
牡牛の飼

此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼

音枚



並



此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼
此の地は古くより
神戸の北隣
世の村
牡牛の飼

大久保の元海
録

今の東大久保より右岸の坂南側は和泉瓦といふ
地をいふを意し茶とみあるは夏にすくも海に餅
せしりて大久保の名物とすすか材美樹を極く古
高標地ありそれに次の岡の如く高標地あり
弘化二年の序

大久保と神奈
代名
もあふし餅
三のやあふ

大久保坂下
名
もろに餅
和泉屋長持

又別の地へあへて地を好くすくも海にすくも
ふしが地へあへて地を好くすくも海にすくも
坂下なるが地を好くすくも海にすくも
しとふが前の地の如くすくも海にすくも

前記大久保と名ありて餅のこころは東大久保より右岸の
茶とみあるは夏にすくも海にすくも
地をいふを意し茶とみあるは夏にすくも海にすくも
せしりて大久保の名物とすすか材美樹を極く古
高標地ありそれに次の岡の如く高標地あり
弘化二年の序
大久保と神奈
代名
もあふし餅
三のやあふ
大久保坂下
名
もろに餅
和泉屋長持

天明四年の
苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の
苦まはれ
の序

天明四年の
苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

天明四年の苦まはれ
の序

河の沖のわが玉か也
死に日よ玉子瑞る
今日か死のさ見ぬ
さうか越谷千位の先だ
ねのちう麻帯でんのかもれぬ
遠くく牛砂の火子
深い中た藪の井え
植の高柿の葉を寄
深川の敵まき
びりくもくゆき坂
よろづ昔京の谷坊
以二の世もちちを両あまをば又の隠語なり

河の世のい
死に日よ海
今日か盟りか
左様か
ねのちう麻帯でんのかもれぬ
響せよ
悪人の中を
響るに
馬鹿のちみよはたか馬鹿を
まき
美事告
隠語なり

河の所の青い磯
鼻の下の日本坊
ヨバのヨシヌイ荷
おやめなんぼ
坂が翹ちう草虫や藤
泉のあまおちよら
北がなつたが日本三角だ
やがよけんか藤系妹千子
境島のわづら姫
銀の舟中姫
さうこうまう鳥城の金玉
腹のちう危丁

女の面貌が福の面の如き
鼻の下の日本坊
ヨバのヨシヌイ荷
おやめなんぼ
坂が翹ちう草虫や藤
泉のあまおちよら
北がなつたが日本三角だ
やがよけんか藤系妹千子
境島のわづら姫
銀の舟中姫
さうこうまう鳥城の金玉
腹のちう危丁

元禄の雷鳴
雷鳴の響けりや
どやうにかう物か
あつては
世間の
お茶のこさし
着たゆい雀

北の雀は
けい雀は
けい雀は
けい雀は
けい雀は
けい雀は
けい雀は
けい雀は

元禄の中
と
私

雷鳴の響けりや
どやうにかう物か
あつては
世間の
お茶のこさし
着たゆい雀
元禄の中
と
私
雷鳴の響けりや
どやうにかう物か
あつては
世間の
お茶のこさし
着たゆい雀
元禄の中
と
私

四半の
及の
一

新井氏の
三分
あり
の
と
の
これ
有
こ
ま
と
と

新
の
り

科
と
と
萬
萬



後

極印不明

新
及
の
の

照
の
の
の
の
の
の

脚
の
の
の

と
の
の
の
の

川魚の味
考まじり
とさし
料理

のたまはしきり来たあつと来たあつと
塩漬のたまはしきり来たあつと
たまはしきり来たあつと
たまはしきり来たあつと

大二三年の魚の味料理
味料理

長

計(さし)に
計(さし)に

ノツペ

焼豆腐の粉を

國

汁(さし)に

粉汁

けいせきと油と

油揚げの味汁

三村の味汁
揚げの味汁

又々

揚げの味汁

大豆

揚げの味汁

塩

揚げの味汁

三

揚げの味汁

土

揚げの味汁

用

揚げの味汁

中

揚げの味汁

の

揚げの味汁

茄子の葉丸茶

由はよくしてありて茄子の葉丸茶の製法

巻二

此の茶の味は苦味ありて... 茄子の葉丸茶の製法... 巻二

茄子の葉丸茶の製法

茄子の葉丸茶の製法

安来節

安来節の製法... 安来節の味は... 安来節の製法

多刺葉樹
火災

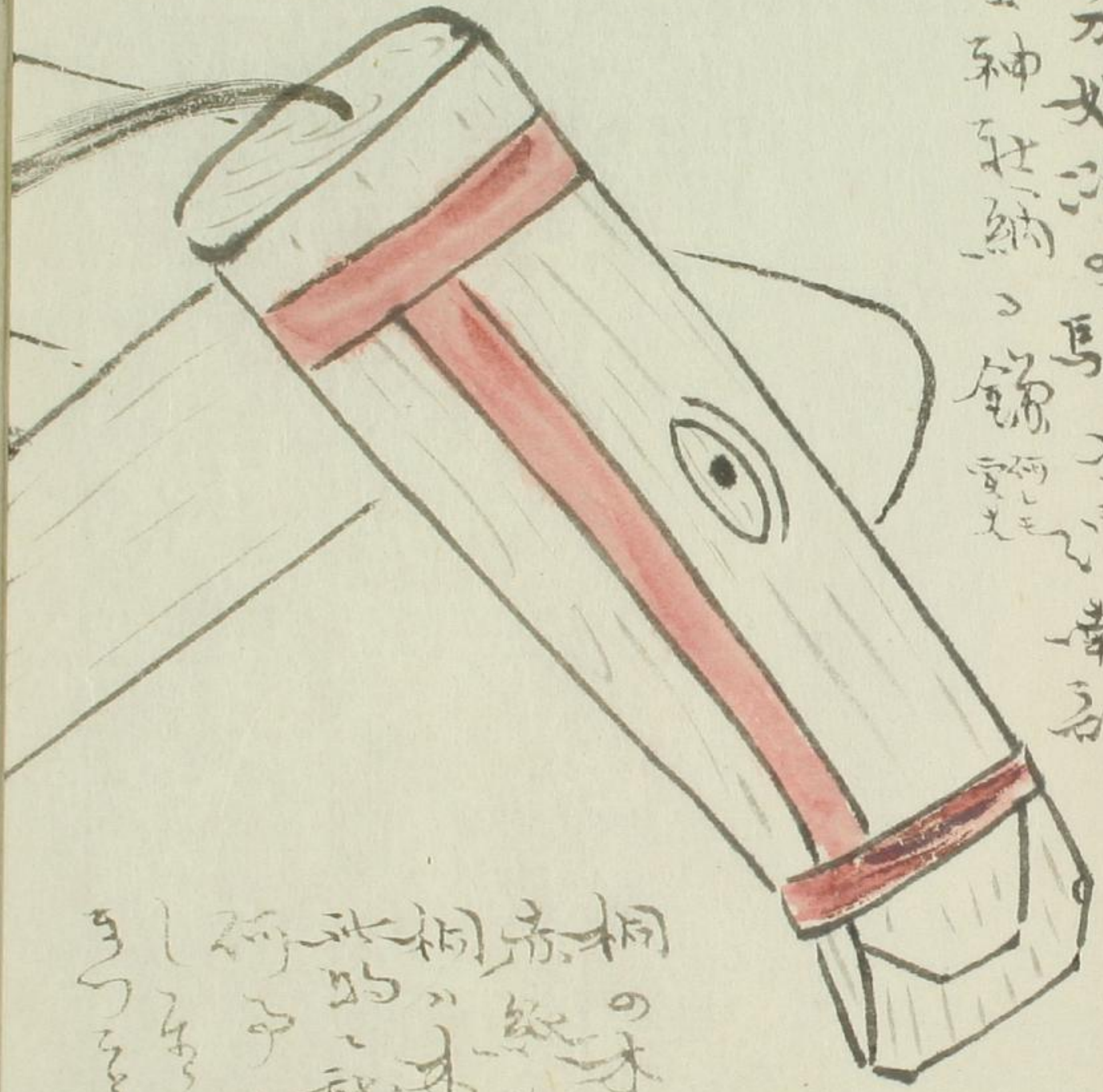
大徳寺の木の葉を多刺葉樹と云ふは
樹の葉は火に燒けることを以て
此の葉は火を多刺葉樹と云ふは
鴨柳子の葉は火を多刺葉樹と云ふは

利一の狸

利一の狸は金匱の書に大徳寺の木の葉を
後世傳へて此の木の葉を多刺葉樹と云ふは
大徳寺の木の葉を多刺葉樹と云ふは
此の木の葉を多刺葉樹と云ふは
此の木の葉を多刺葉樹と云ふは
此の木の葉を多刺葉樹と云ふは

檜那姫治の
物に子孫
の國

檜那姫治の物に及
子孫神に納る録



檜那姫治の物に及

桐の木を以て
赤桐を以て
桐の葉を以て
此の葉を以て
何の葉を以て
し

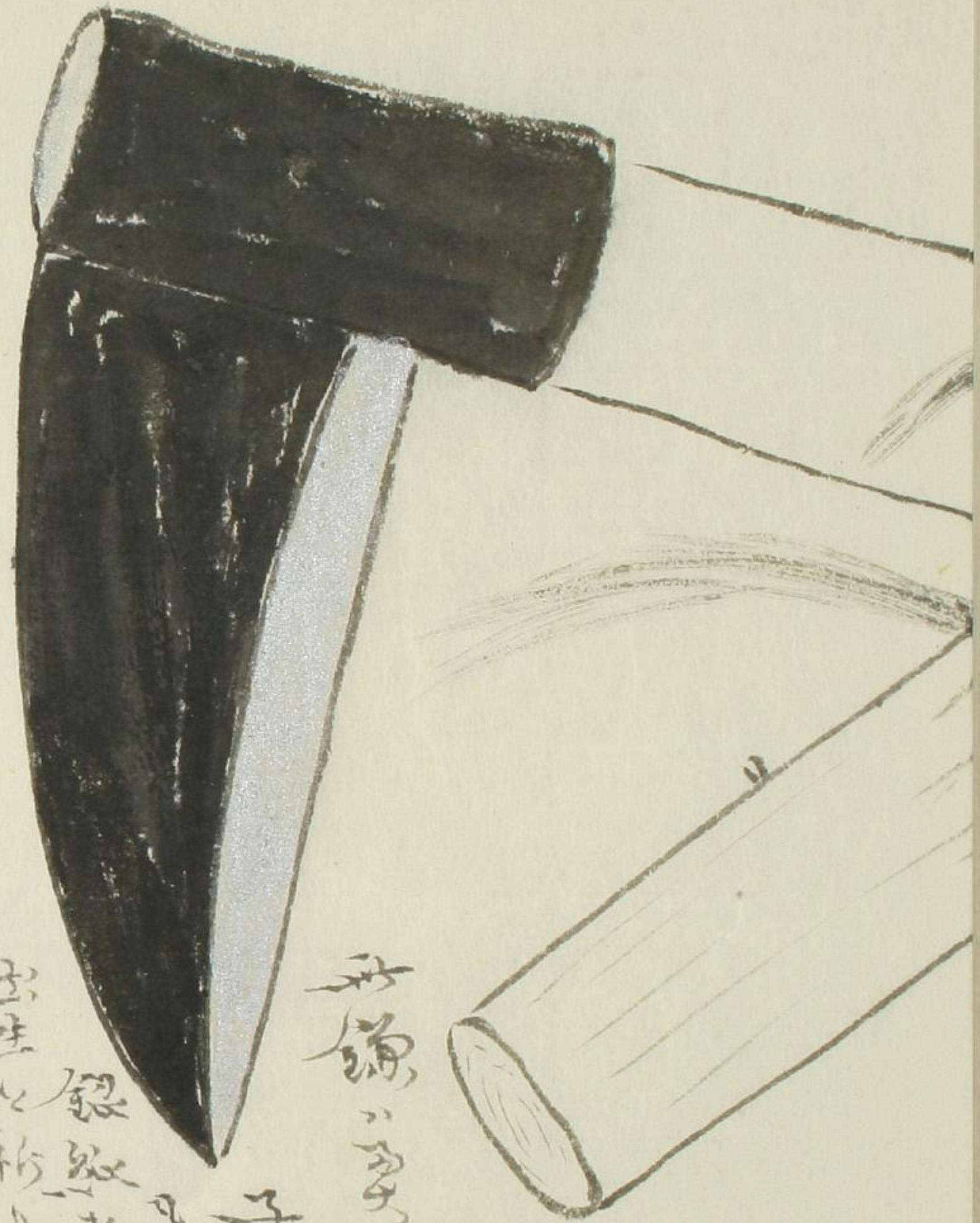
錢の
大津を
ぞし

大津をぞし

高城沖高の... 南郡... 三井寺の...
... 出さぬ... 下... 引... 三井寺の...
... 鐘... 鐘... 鐘...
... 鐘... 鐘... 鐘...
... 鐘... 鐘... 鐘...

天保... 天保... 天保...
... 天保... 天保... 天保...
... 天保... 天保... 天保...
... 天保... 天保... 天保...

心願成就せし... 鐘... 鐘... 鐘...



子室... 鐘... 鐘... 鐘...
... 鐘... 鐘... 鐘...
... 鐘... 鐘... 鐘...
... 鐘... 鐘... 鐘...

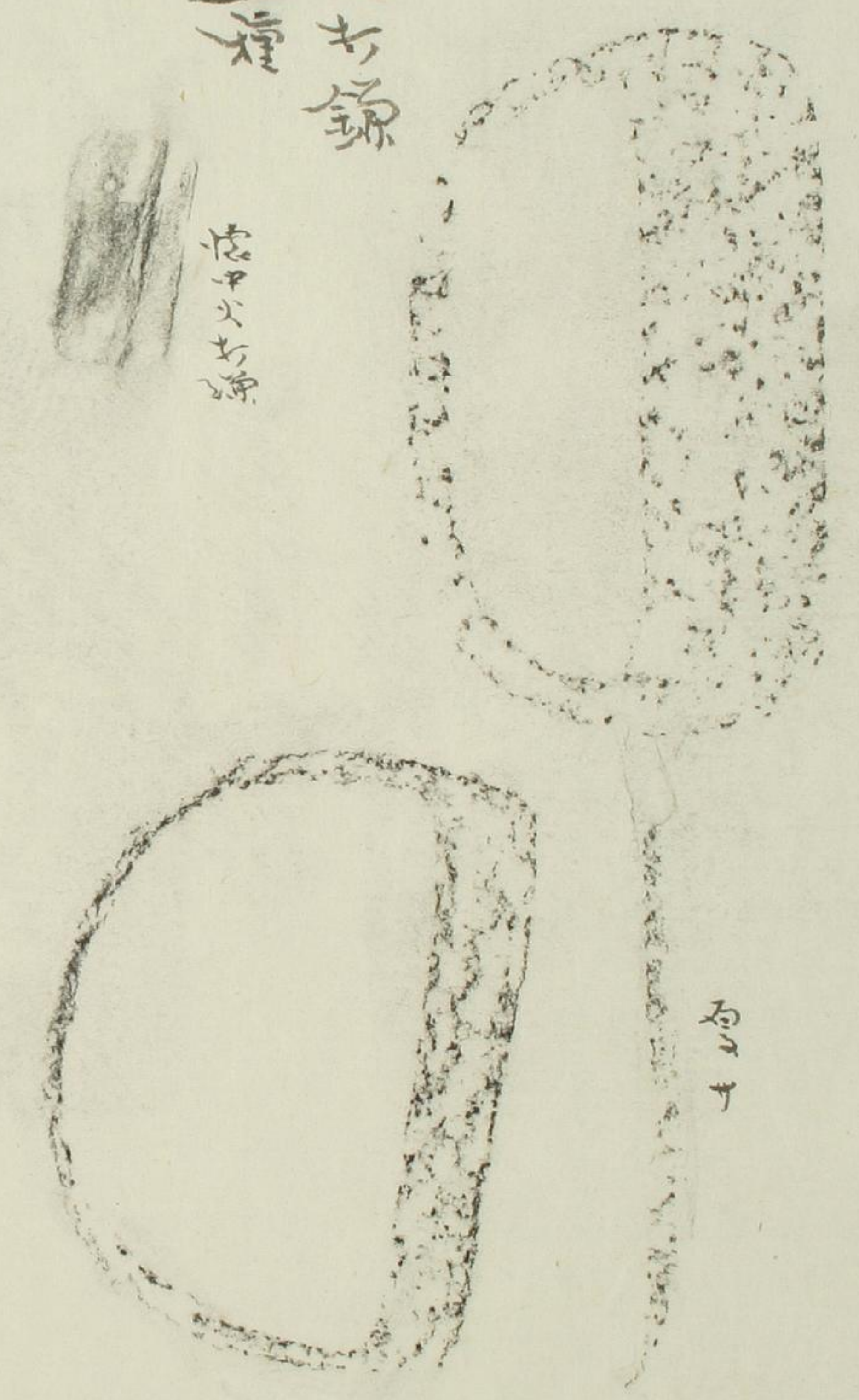
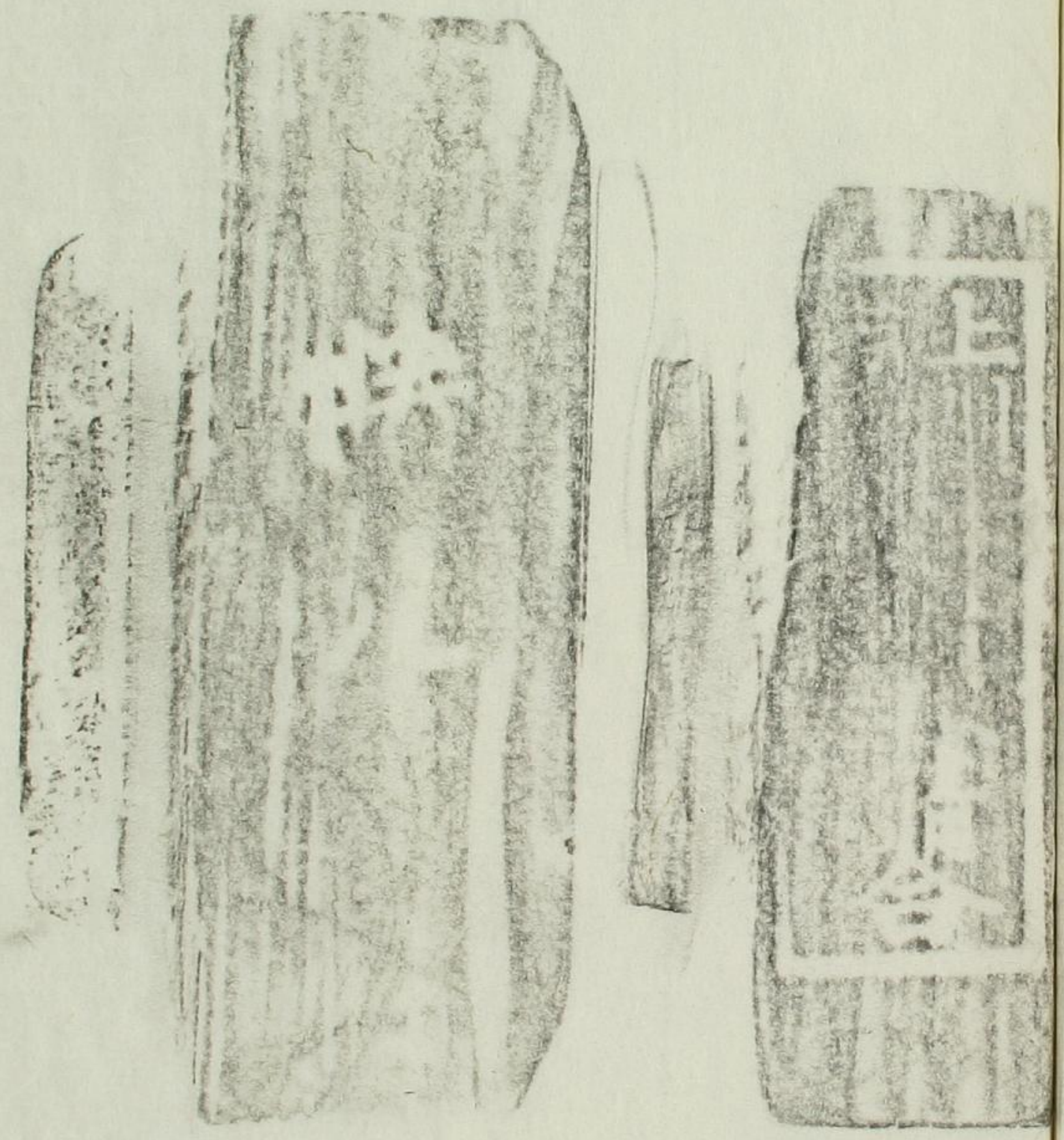
火打鉢
十二種
の
形

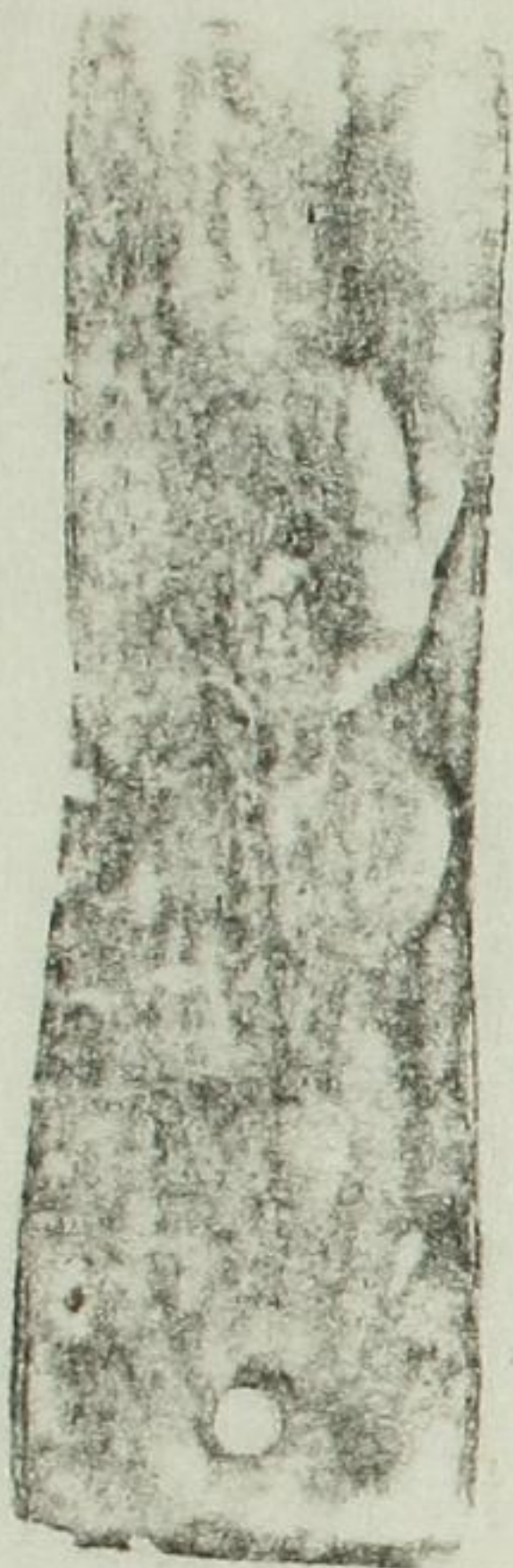
火打鉢
七種

徳平火打鉢

徳平火打鉢

石丁





いれさあがのまにをこ



又此の古律ありし其の意をよめるに
は...
かきしるる年...

大將まげのこころまじりし
かきしるる年...
霜天正露と詩を吟ず

その如きなりしもの當めり...
先細...
後...
...
...
...

或人の日記中に所記ありし米相場

天保八年十月
白米の相場

- 天保八年十二月 白米 一斗 四斗 一斗
- 九年正月 白米 一斗 四斗
- 十年六月 白米 一斗 四斗

天保八年十月
白米の相場

同日記に記したる米相場...
...
...

天保八年十月
白米の相場

天保三年の成
時所解

田中... 天保三年の成の時所解... 女... 供... 事...

電車用器の
数

電車用器の数... 用器... 数...

本河張の自記

本河張の自記... 用器... 数...

天保三年の成
時所解

天保三年の成の時所解... 用器... 数...

一 百七十八文

何れの間解見料

一 甲子ハ文

山及せん

一 甲子リ文

上下代御事

一 廿一甲文

事

一 三十三文

お右の事

一 十文

なり

一 三十三文

見... 事...

吉備人形の
犬

吉備人形の犬... 犬... 事...

此の元
女
三好店の
増

とあり甲辰二年蓮葉淨地夫婦とあり天保十三
年蓮の雨山堂惣無事かお後七三河の元
其昔提督の屋司の娘おおの昔提督の娘の
生せしとあり此の戒名を貞香信女とす
此の何れとて御者の造りたるが僅の年
戒名も多し所か
此三年の火災東區の三好家者多し又此の
と題せし日録に流石の徳ありこれより
れは此の越えり元皇政若此方より
りて此のありを
約司より本元 十六
王子茶の樽 十六

此の
増

振替の
初名

下谷の
小坂

此の毎時観音の勧帳とあり
甲辰の増の如
和音の元
此のあり
其のありあり
右の増とあり
一方の増とあり
津輕屋振替 初名 高橋與惣次
の筆 元
下谷の強寄屋所に小坂といふ
此の増の増物とあり

此高き山に... 命

花婿と云ふ
手袋の黒せえ
し

さらさら
音

長沙唐人... 命

此高き山に
手袋の黒せえ
し

此高き山に... 命

花婿と云ふ
手袋の黒せえ
し

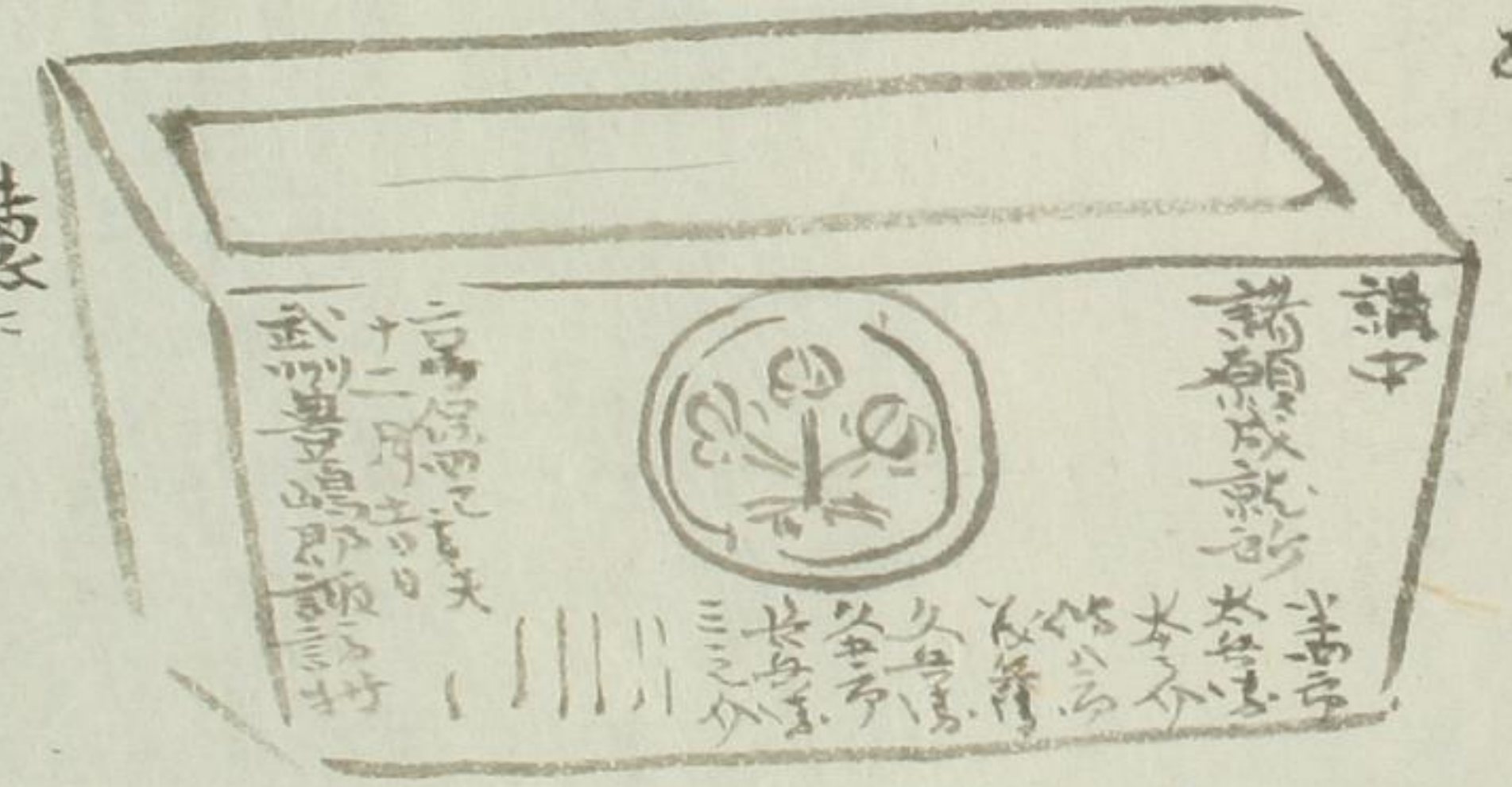
此高き山に... 命

同社正局に於て
文下り致す

諏訪宮

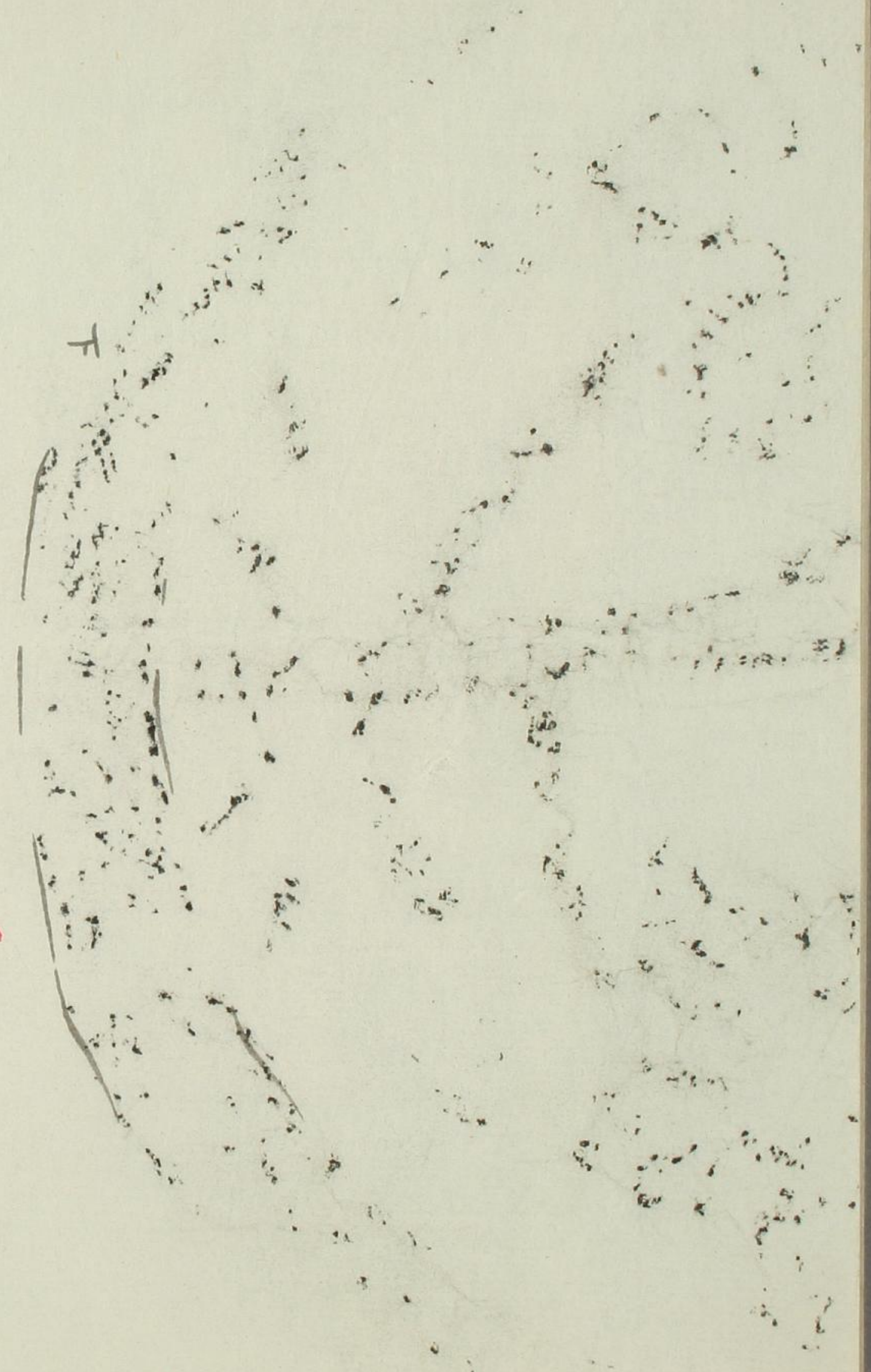
佐渡山書

奉造諏訪宮神前
表



表

表
宣和四年三月吉日
佐渡山謹言



海防神として奉祀申す
 其の由は、中ノ支那に
 郡改し、その支那ノ境の
 言國者より、なほあり

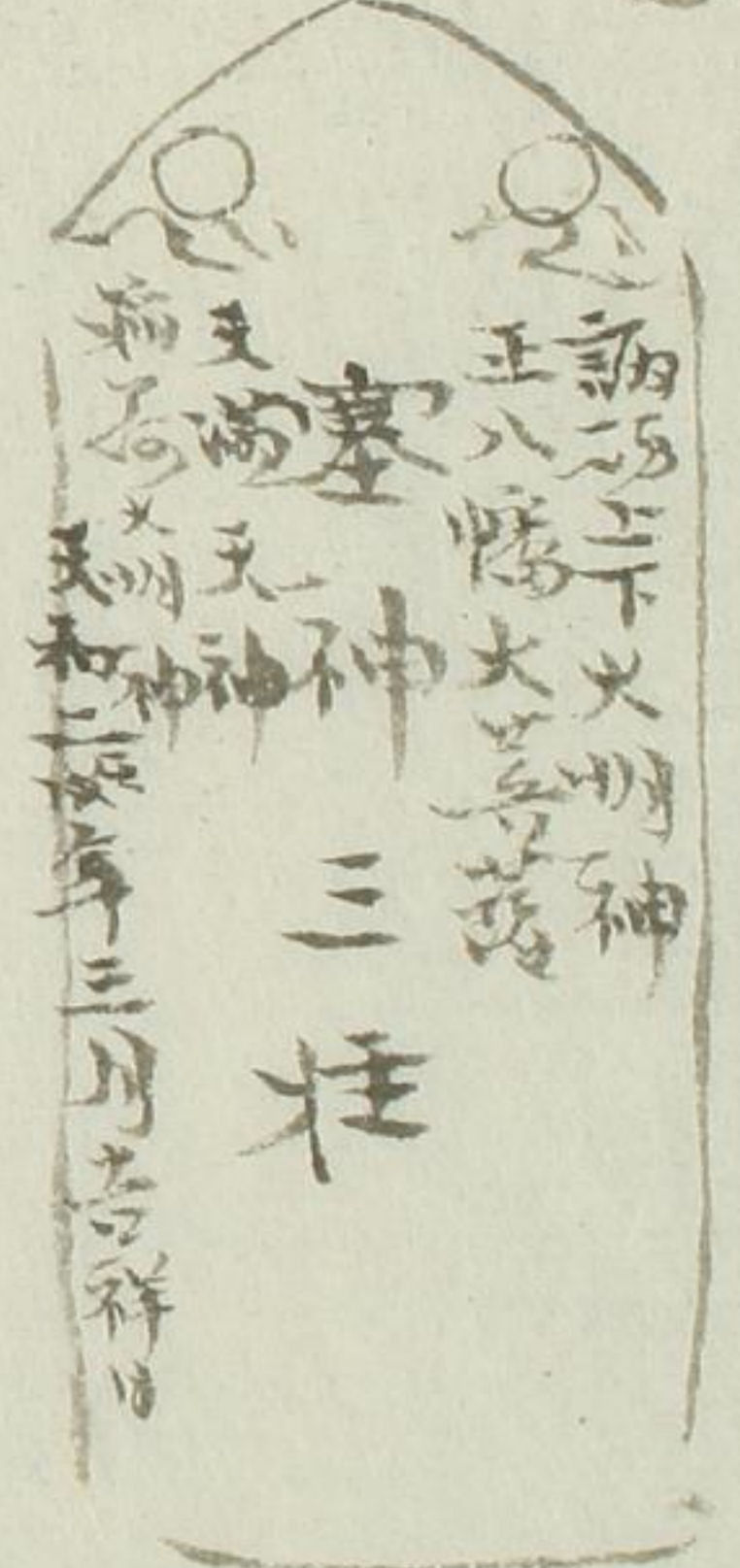
奉神三柱の文

郡改し、ありあり

三柱層申の據

ありあり

此神社の由、西大久保也の鯉比神なりしと後、
 社を安んずし、社と別をなせり、と云々、村如し、
 遠近を、此也、なり、山形、的、所、北、境、せ、也、あり



おひ世

言國者層申塔

三尊種子あり上の如し

寛文五年

奉待層申諸領取氣處

十二月八日

郡し三柱あり

二尊あり年代下り

其寺、
 寛文五年二月廿日
 奉祀、
 山形、
 北、
 境、
 せ、
 也、
 あり

寛文五年

二月

莫心少しく教へたる

莫心少しく教へたる
者此の先生なる
莫心

廿三年十月
夕刻
見之

琉球國舊記卷四 (新編書院海防)

錢

成化元年乙酉高徳王為進貢兼求錢事特遣正
議大夫程鵬等入闕赴京吾華編曰琉球用日本之
錢以是考之成化年而用中國之錢後人用日本錢
耶至于近古始鑄中山通寶之錢後有赤錢者又有
鳩月錢者順治年而日本福州國分郡人有平文伊
地知大命者亦以重陳者至琉球受仕後授當而此職
士年乙未奉使赴島見府公庫有加治赤錢亦以無
用為遂將此錢皆與重陳受而歸未四五而甲午
七月二十九日始于越來郡也京邑並與山而鑄在

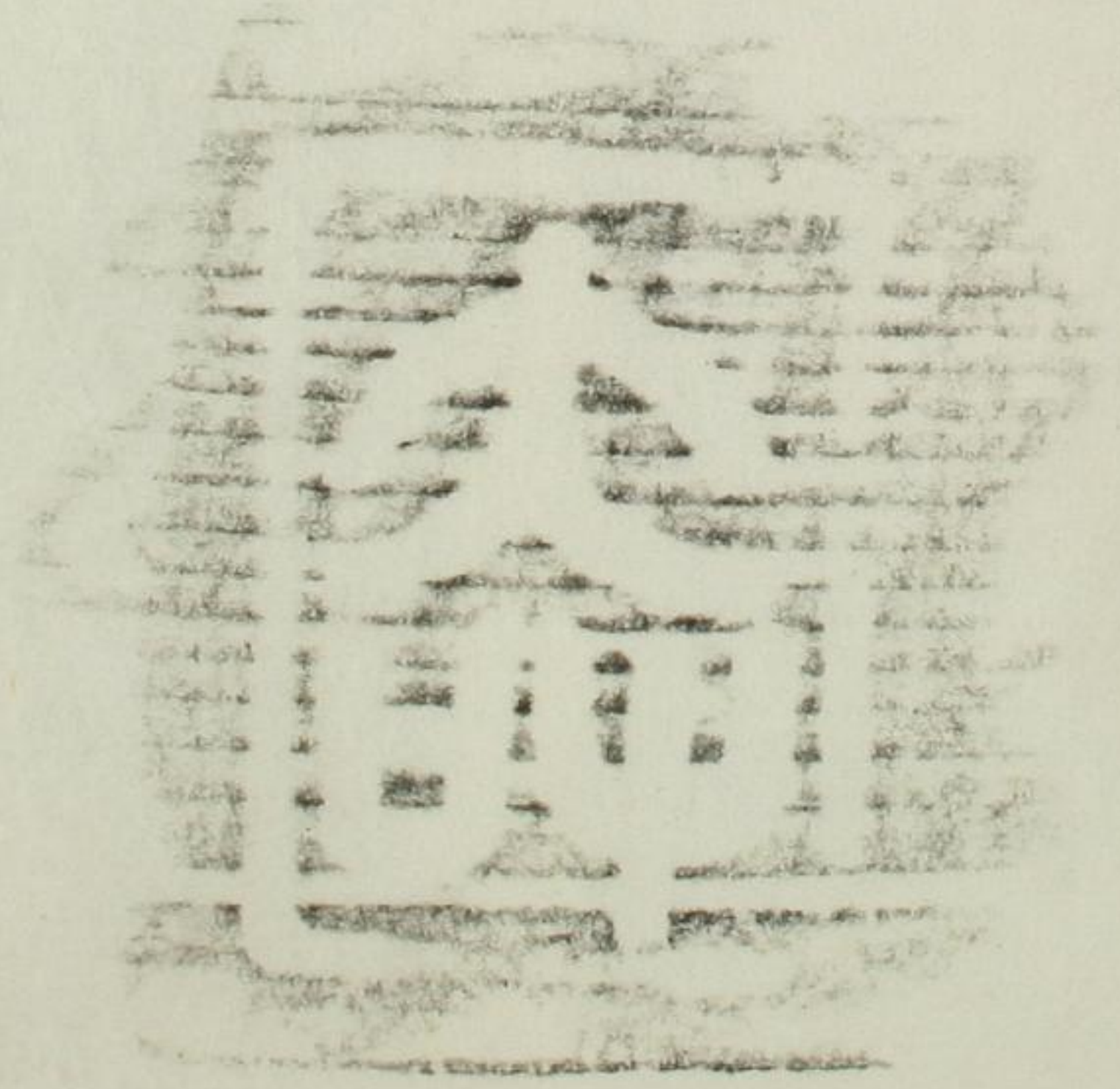
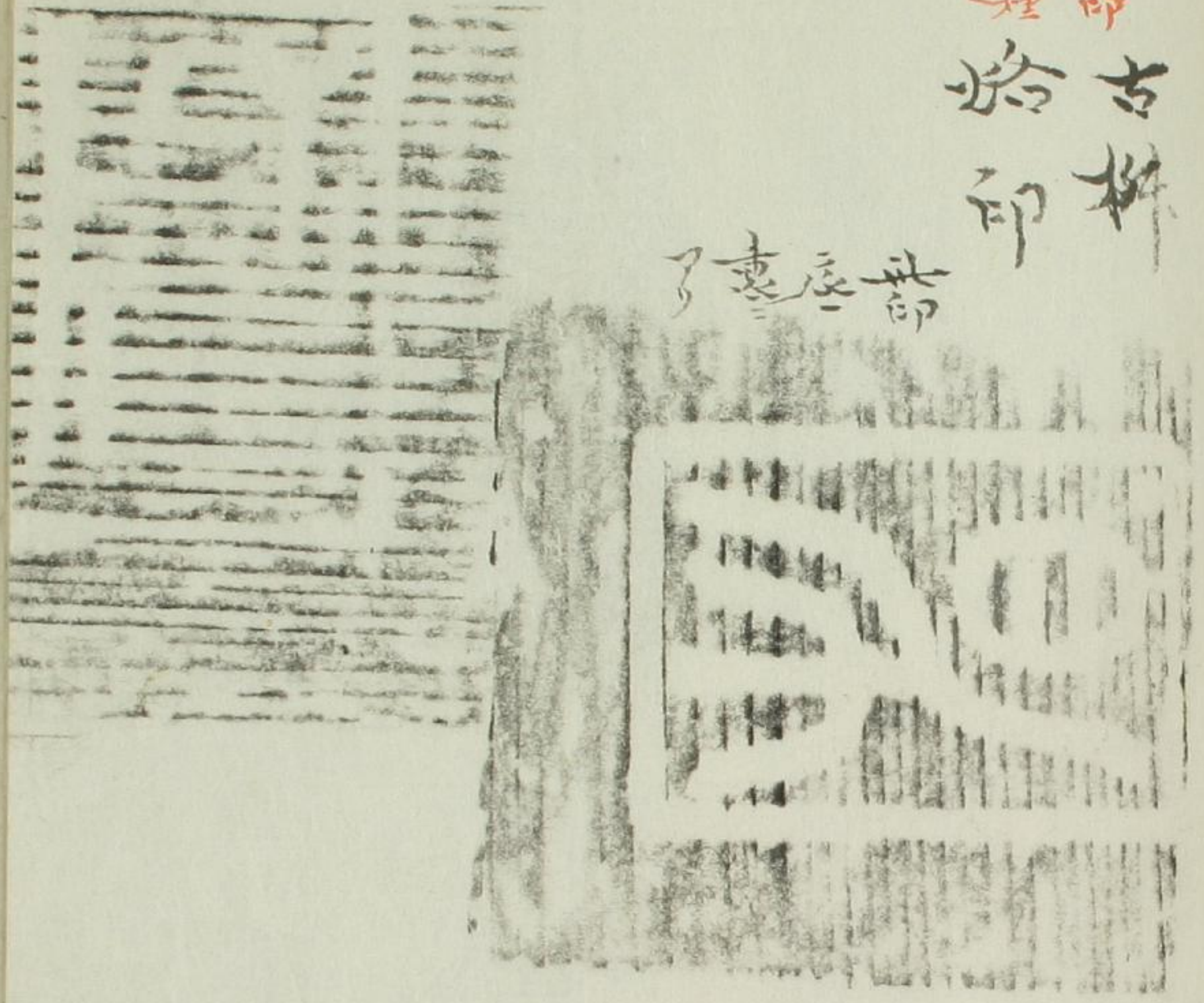
琉球國舊記
卷四
錢

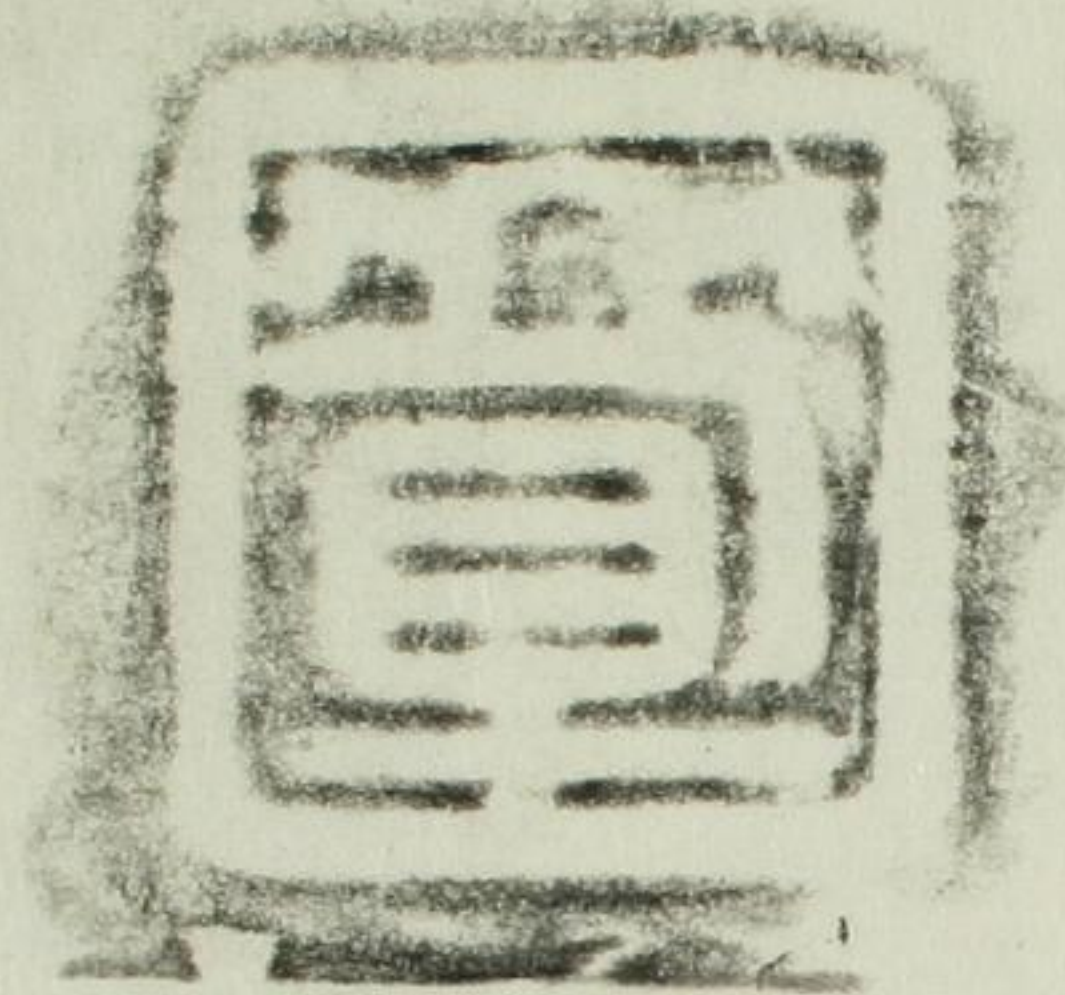
古原細見が
細長柄本
望本と云ふ
わの体裁

古原細見の横本ありし。安永三年の春迄ま
り表題百五草と云う横本の如き。右側と左側
と表題のせしが。望本と云ふは。知の本と云ふ
に二段にありしもの。形式ふれせの如く。片側
三枚にありしもの。此の如きもの。見
るに。中山の如き。と云ふ。古原細見の
此の如きもの。見るに。中山の如き。と云ふ。
古原細見の横本ありし。安永三年の春迄ま
り表題百五草と云う横本の如き。右側と左側
と表題のせしが。望本と云ふは。知の本と云ふ
に二段にありしもの。形式ふれせの如く。片側
三枚にありしもの。此の如きもの。見

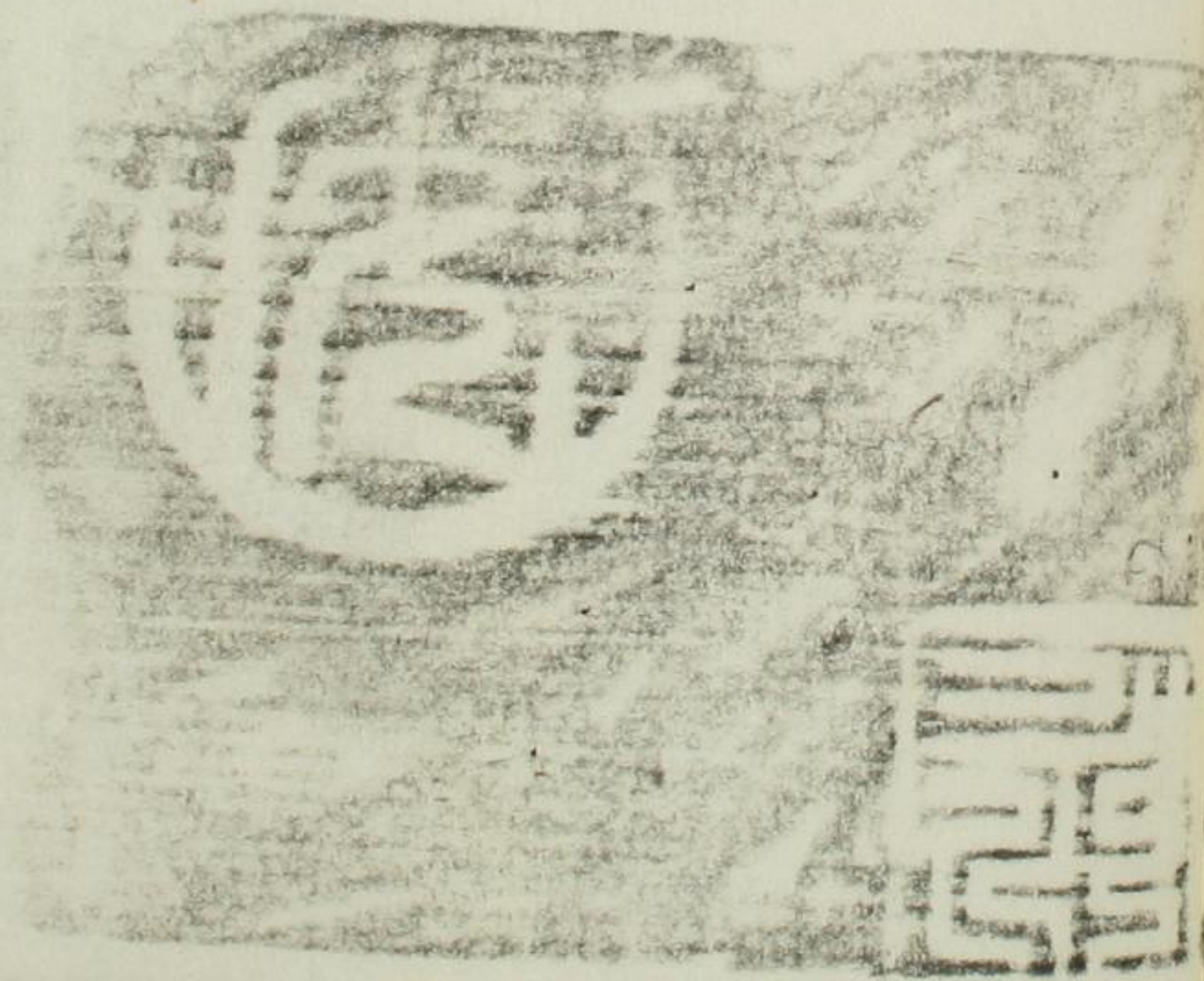
古原細見が
細長柄本
望本と云ふ
わの体裁

古原細見の
望本と云ふ



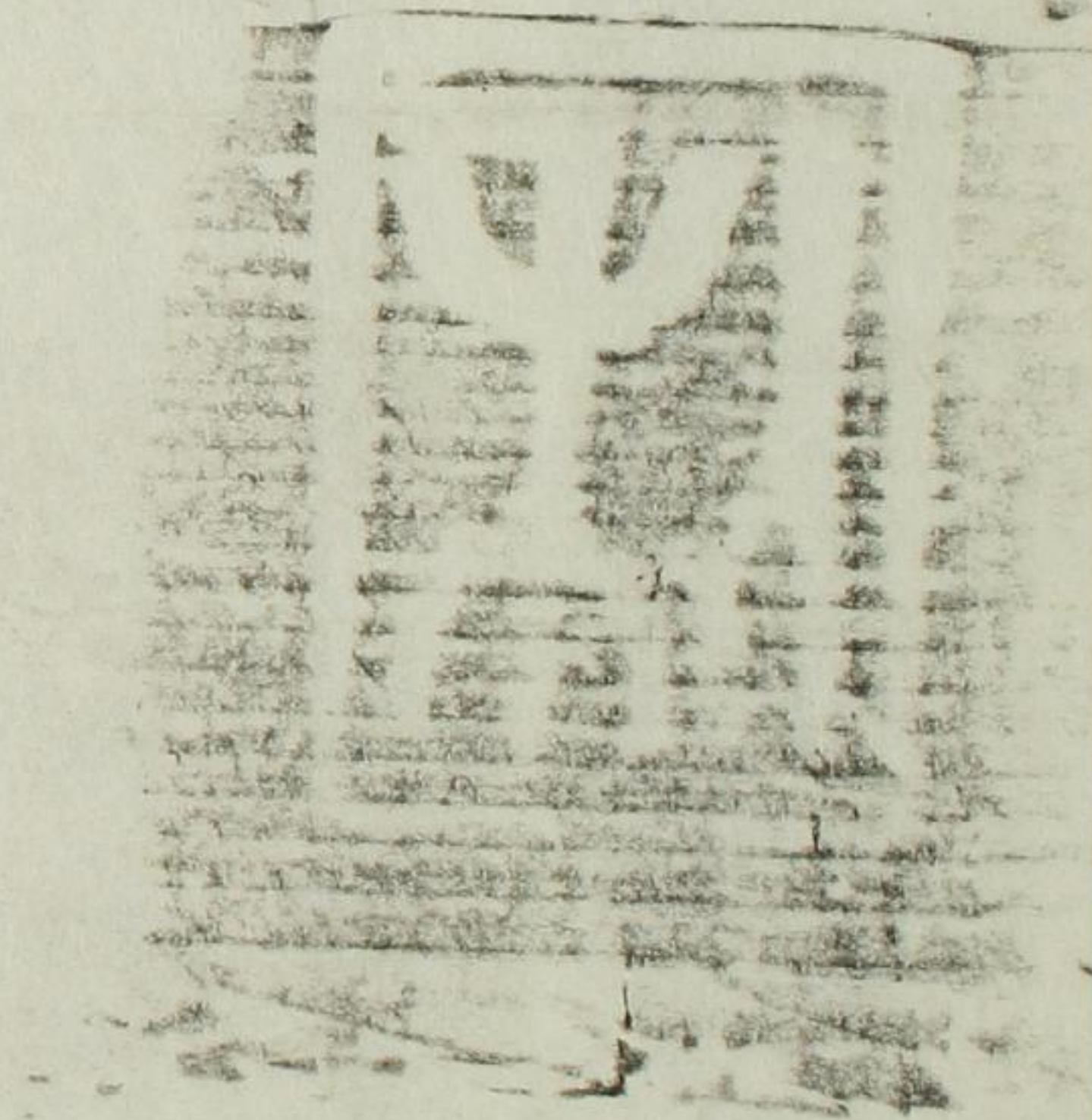
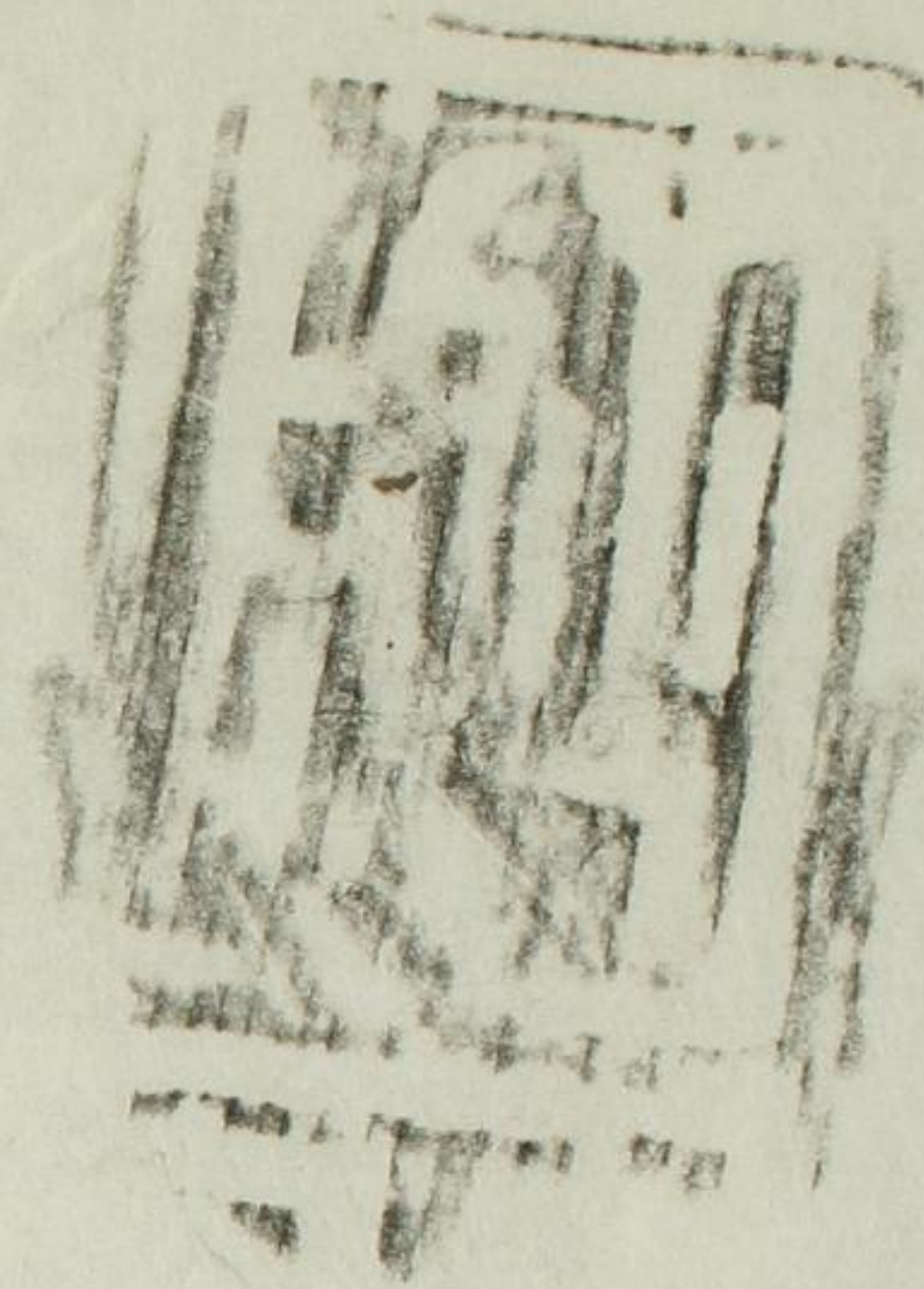


古
林
浩
系

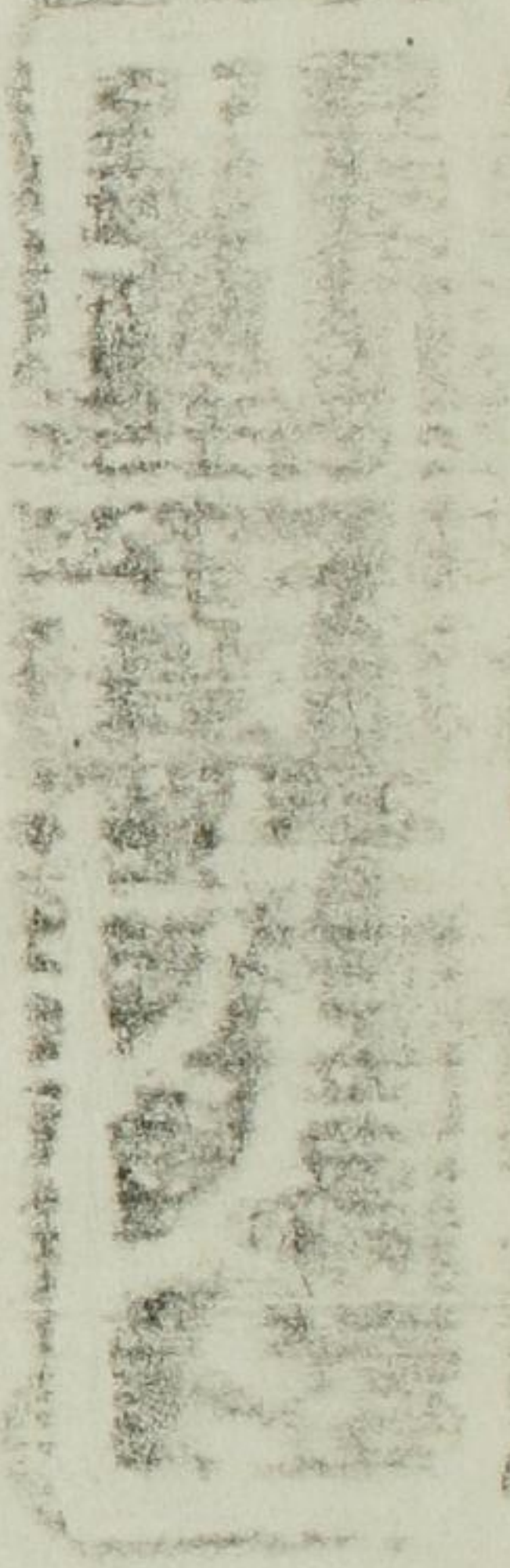
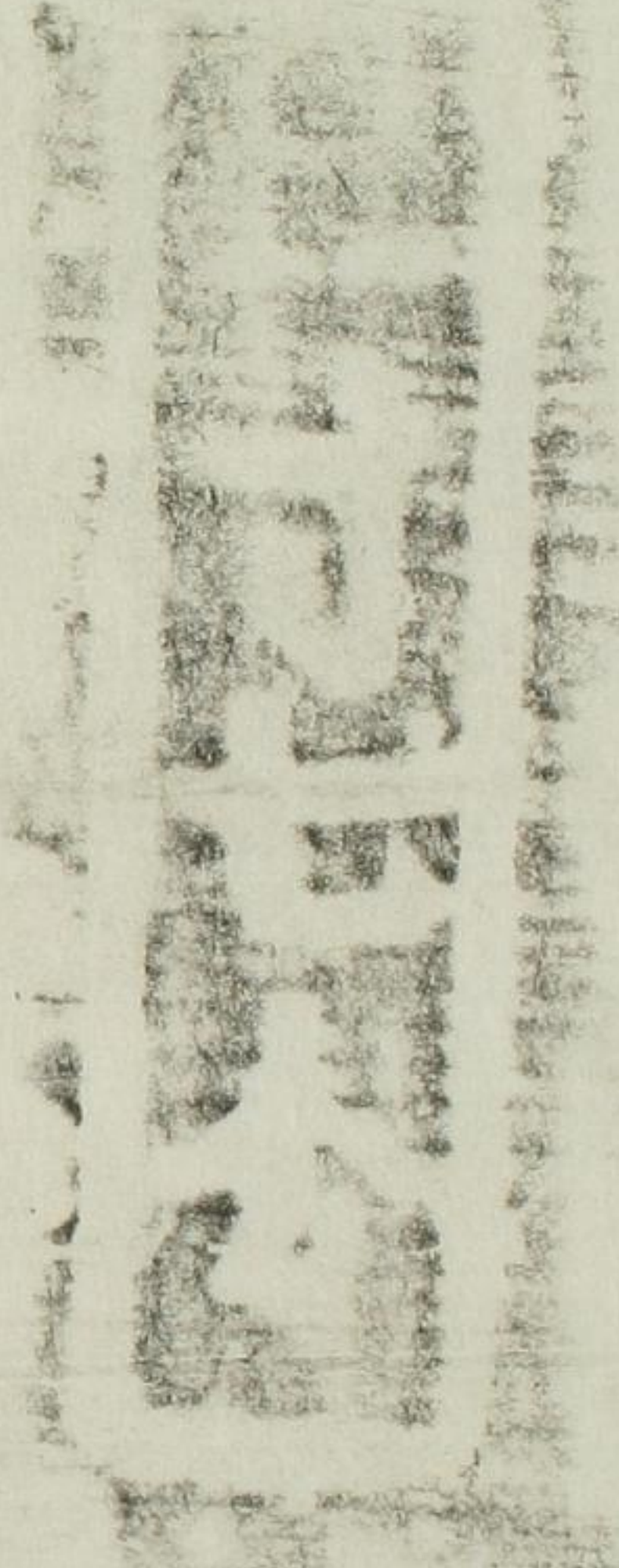


蘇
尾
張
必
方
力
之
心

正
成



古
碑
殘
石





終印

三尊像三種生可久文藏

春慶院の
の筆に就て

道三自筆
の筆に就て
古筆の
度量あり

為心三年十月十日... 高野の... 京都の... 道三自筆... 天正十三年... 聖意無盡藏と題せし書あり

年の多き書あり書中

開元正錢百二十錢重 為水二升 半三錢 為水五合

號一尺開元錢十錢平列橫用其長一錢廣八分也即百工準範也

前元改重量より高きこと 彩雲の七令分量考
に就て比較し所あるがごとく 是れは 仁宗
下ひ古改より高きこと 是れは 仁宗
四年清浄元道宣監二分重二錢四分重一錢重一兩
弱輕重大小之中一と道三のより唐のよりこれより
是れより本邦のより一と高きこと 是れは 仁宗

武蔵の松
武蔵の松
武蔵の松

武蔵大里野妻名土城の地也 是れは 仁宗
極一が根を以て 是れは 仁宗
と云ふは 是れは 仁宗
別當寺盛が 是れは 仁宗
波の根を以て 是れは 仁宗
天のあれが 是れは 仁宗
妻名の 是れは 仁宗
郷と云ふは 是れは 仁宗
福王寺 是れは 仁宗
野妻名に 是れは 仁宗

武蔵の松

南天と鏡の画
あり和鏡

同地方にあり殿と部名と火の留ッタ者として棟の
 同天王寺の塔世川のさき日五六軒ありとカラガ谷と
 云りやと云々又一部浄明院の地に堂也堂
 とぶ小堂ありサウと云々殿とありと三村と云々
 前々女と云々此木と云々上願ア子ガキ
 此の本と云々妙ぬありと云々
 書名智史の寺の知尚と云々の者、イニゲン様と云々
 院と云々と云々南天と鏡の繪横尾
 三村と云々此の地の南天と鏡の繪横尾
 ありのあり大略左の如く因を云々鏡と云々念ふと云々

鏡横尾の鏡と南天



南天と轉羅の意なきが兵二つを画一は2000

田舎の日記

大雪の三日の氷の凍りし日... 田舎の日記... 元禄八年二月十日...

田舎の日記

元禄八年二月十日... 田舎の日記... 大雪の三日の氷の凍りし日... 田舎の日記...

河内國与力千人 銀四枚
一箇中 銀三石 不地千人
一箇中 銀五石 不地千人
一箇中 銀七石 不地千人
一箇中 銀九石 不地千人

おきき前記の通り申上りし事
前記申上り申上り申上り
おきき前記の通り申上りし事
前記申上り申上り申上り
おきき前記の通り申上りし事
前記申上り申上り申上り

新司右左衛門
二王背殿

新司右左衛門 大工保長 西側七面大工棟を御清書

造主 施主 尾加右衛門
大工 加右衛門
日国代

木庫の工書
の工書

木庫の工書 延享三年三月廿九日
延享三年三月廿九日
延享三年三月廿九日
延享三年三月廿九日

あつとふる

色くはなつるはなつるあつる

女を人あつるの女を女を

女を長女を 女を成員を 女を三女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

女を女を女を女を女を女を女を

神田以南は

神田以南は 神田以南は 神田以南は

あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの あまの あまの あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの城の丸。桐の葉を色見とて金忍瓦意

鏡山
鏡山
鏡山
鏡山

鏡山は山頂をいふ。鏡山製造地あり。祝部鏡の
かまはあまの山とてヤクヤトとてと

火馬
火馬
火馬

火馬所古き竹根あり。日所の山にあり。火馬
忠加五三ヨシヤフセー 忠は五平子と云

北加山

長
長
長

長は長高下野新宗徒群居。此山出煙素書と
題し梅井虎太郎なるもの製をせり。写す
林若者といふ也

石
石
石

石七支刀

長二尺四寸あり

○平形而



銘金象眼

泰始四年六月十日丙午正陽造

百練千支刀

泰始四年六月十日丙午。陽造百練七支刀と云
西暦泰始四年即西暦二百三十八年也。我
邦の古き銘あるものなり。而も王の御
七支刀七子鏡を石七の張妙く飾りたる
又石七の柄を木製の形のものあり。石七
前後に出る棒の如きものあり。此の



馬之形
和鏡
の
意

右河の繪馬、三河の如く、東照宮寺(願)の
九のまゝ、様、或年、り、物、或、の、様、の、繪、の、ま、り、牛、の、
様、の、ま、り、同、く、以、三、年、の、月、日、大、久、保、の、寺、に、
此、繪、馬、の、様、を、思、ひ、繪、鏡、の、吉、田、の、ま、り、あ、り、其、政、の、ま、り、牛、



吉田牛或殿

或、な、り、の、政、を、吉、田、の、三、河、の、吉、田、の、ま、り、あ、り、其、政、の、ま、り、牛、
吉、田、の、政、を、ま、り、牛、或、殿、の、鑄、造、を、ま、り、牛、
或、年、の、政、を、三、河、の、ま、り、牛、
吉、田、の、政、を、思、ひ、繪、鏡、の、ま、り、牛、
職、工、の、鑄、造、を、ま、り、牛、

馬之形の鏡の意を以て此の請に義

福

四角山

延喜三の
牛跡起

延喜三の
形小判十枚

延喜三年三月十日吉無牛跡起一枚

女家
開運無牛跡起

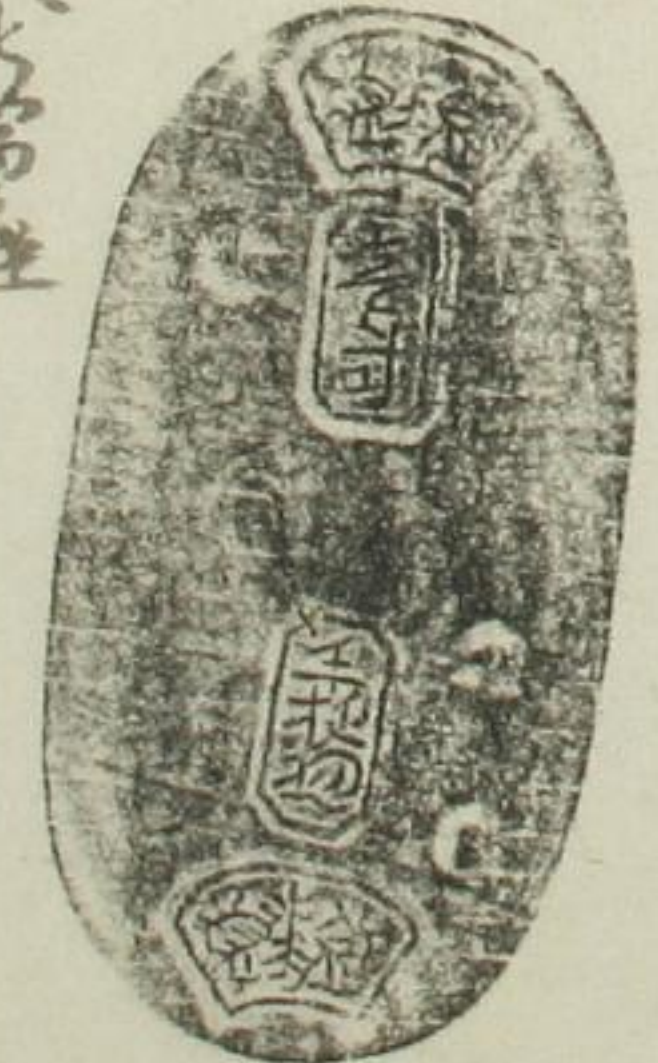
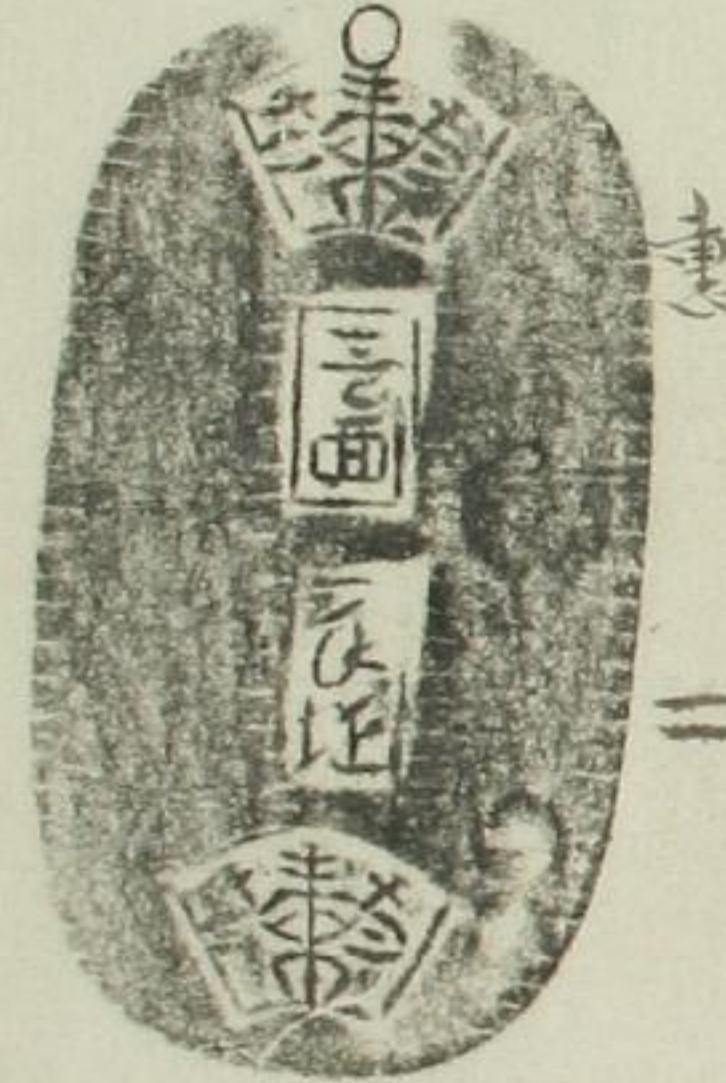
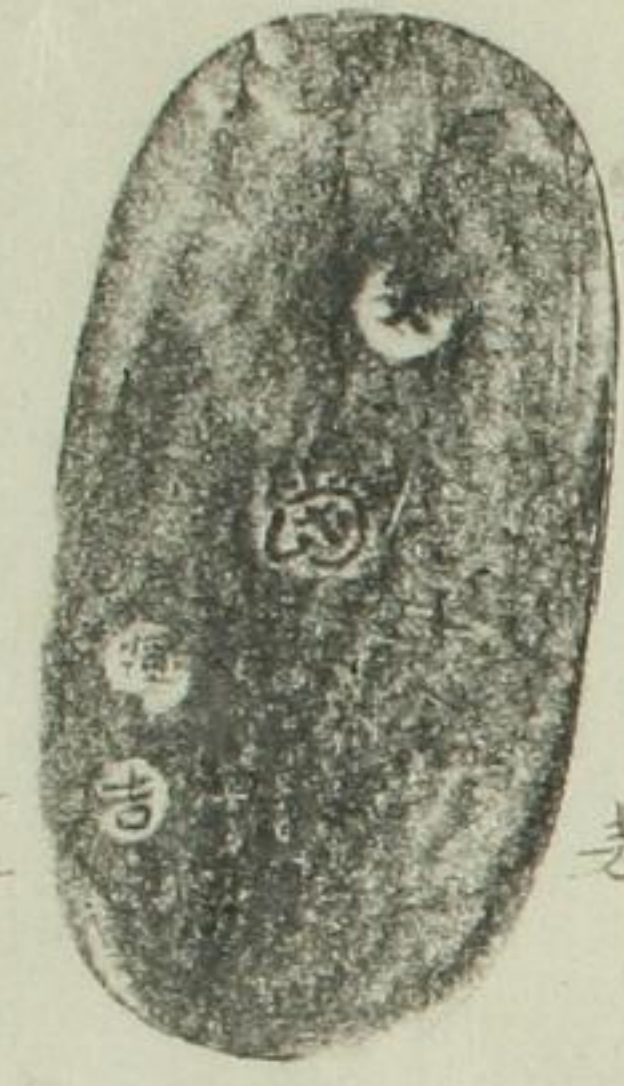
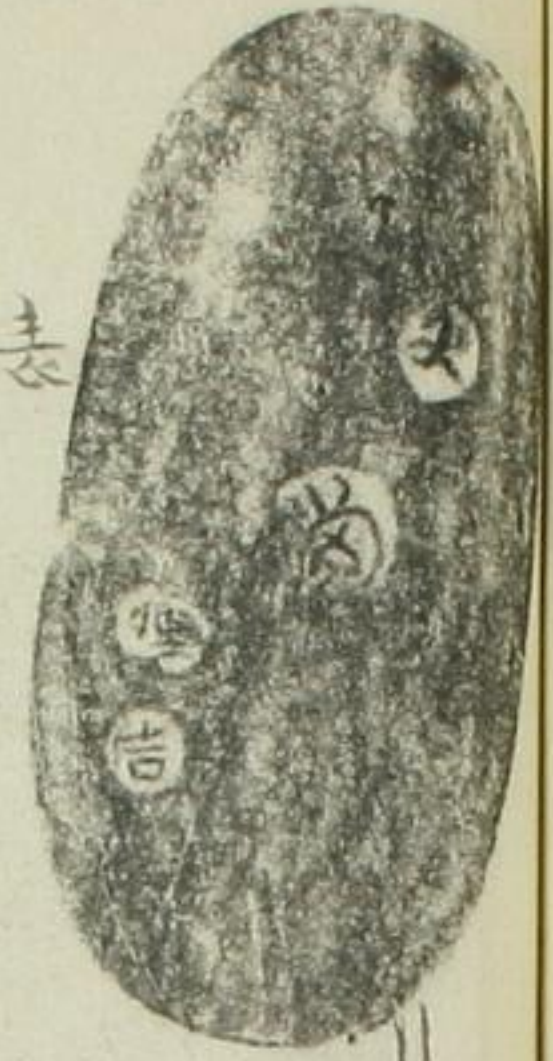
藏
為
前
見
街
角
保
壽
形

延喜三の
形小判十枚

延喜三の
形小判二枚



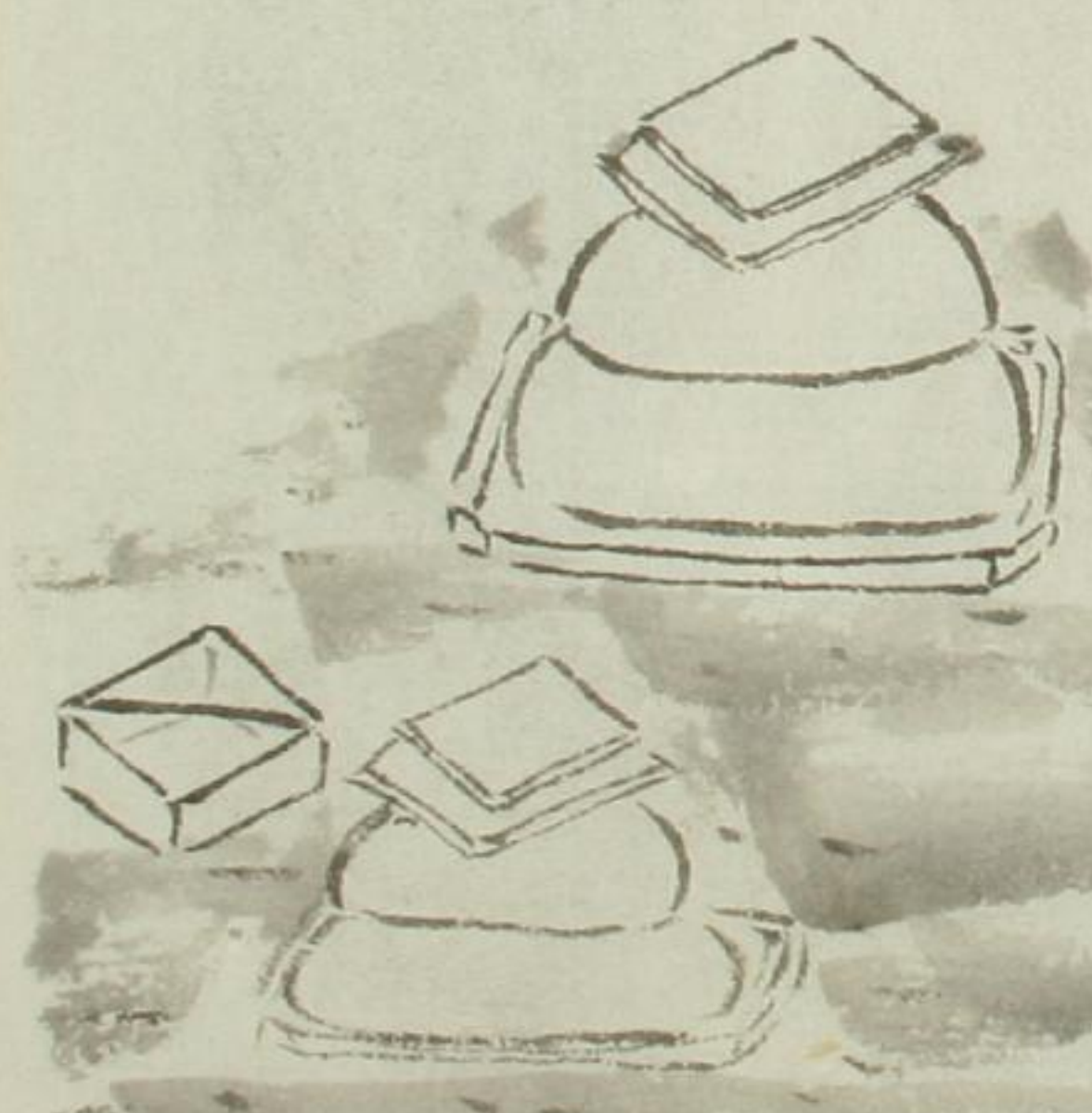
延喜三の
形小判十枚



延喜三の
形小判十枚

大和耕の画
 のせり
 成年中行

元禄ののり給ふや大和耕作給はれ
 右の流石の画本ありて大和耕作給はれ
 早なるのこる中、農政三ノ月の
 用ありぬる農政給はれ
 元日大照大耕をまつ
 三日に山の耕まつ
 甲子に女の礼まつ
 乙未に



常小判始水紋

豊井銀次



狐野地馬新整如芳ありららるるが校製のもの

千住大橋の左側

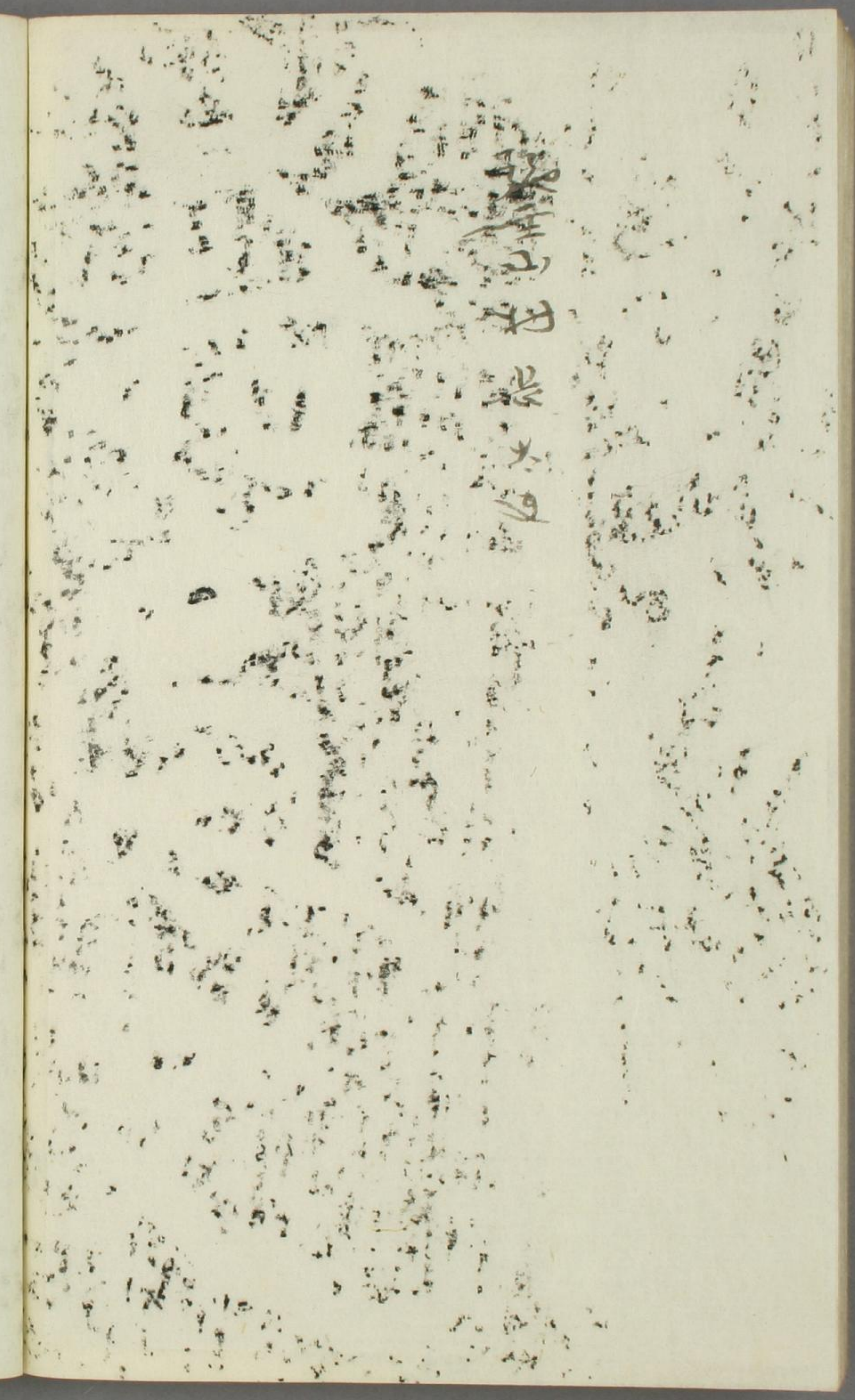


千住大橋の左側
家多橋の本所とて今も
四年前橋の左側の
今の心橋といふ人の好
それ上の原形は古く
瑞雲寺の由緒は味功
て飯子といふ佳
これより味佳

新羅三三御守有

花又村不動院

天竺の草花



心村もあまの草花の
一舟の三舟は
舟の三舟は
舟の三舟は
舟の三舟は
舟の三舟は

舟の三舟は
舟の三舟は
舟の三舟は
舟の三舟は
舟の三舟は



心村

河の赤く千蔵然の長安のみらしくはる特色の
りりりのか草頭あり餅考あり一はら田舎人の心
かろ物かたりは前々農家なる者司管の長く一日
歩み居るは三三の敷くはるおの細く千六月の
炎天なるものなりは加街ありて一考ありて
街のありては右の村の敷くはる一考ありて
お八幡のありて青石の敷くはる一考ありて
寺なる増はるは寺守の老安はるて一考ありて
箱のありてはこれなれば押しはるは考ありて
丸の河の敷くはるは古の敷くはるは考ありて
枚の河の敷くはるは古の敷くはるは考ありて

寺のありて



種子、阿彌陀如来

身、弘、不、明、也



弘の、弘、不、明、也、蓮、花、三、茎、の、若、木、の、花、也、
弘、不、明、也



弘、不、明、也、蓮、花、三、茎、の、若、木、の、花、也、

弘、不、明、也、蓮、花、三、茎、の、若、木、の、花、也、
進、歩、中、に、蓮、花、三、茎、の、若、木、の、花、也、

火成のそふ

うせき

しうちみふ

火のふいふ

ぶらり

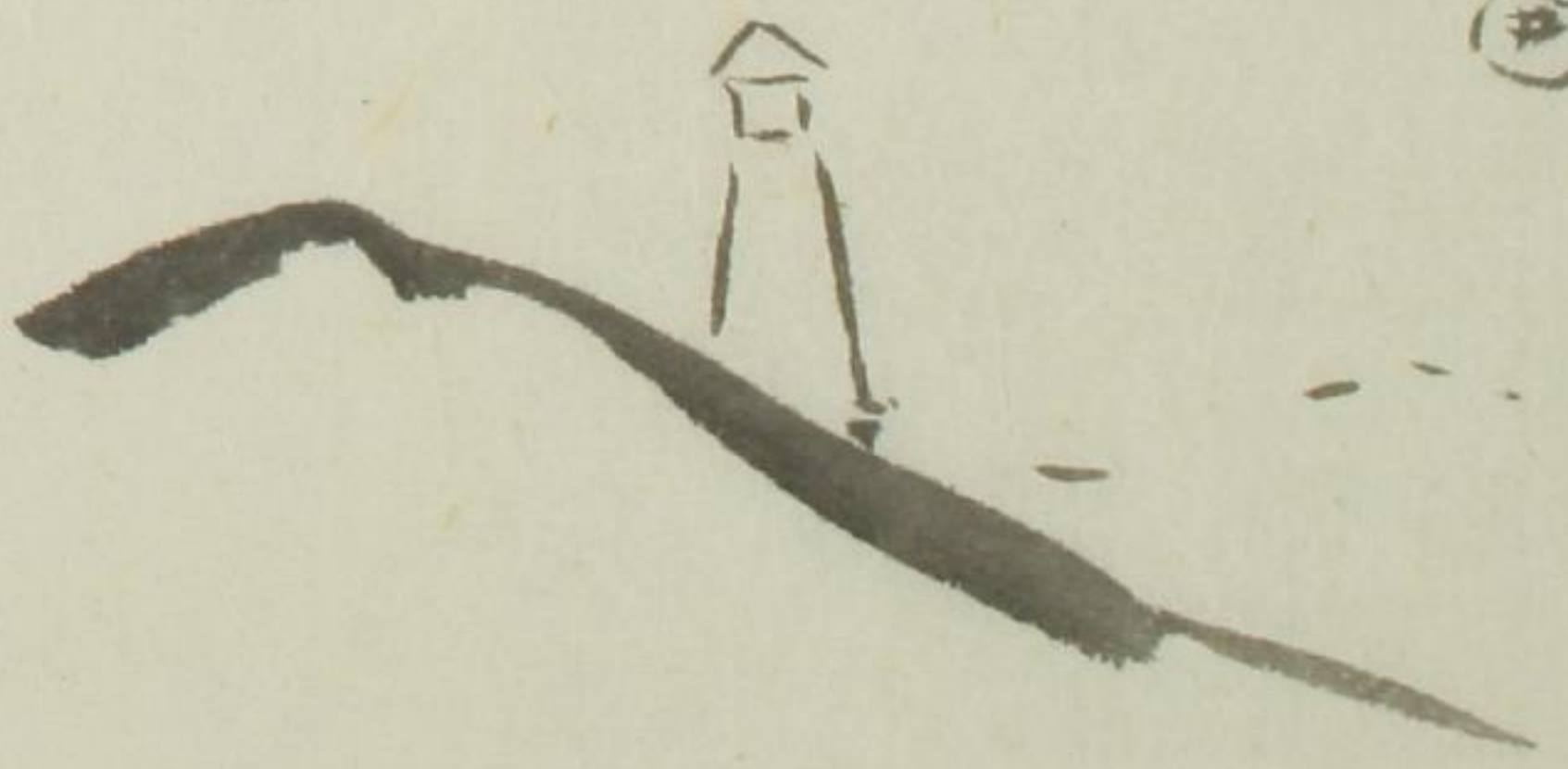
いん

右寺の屋敷をいんかたに

白雲の常流のつらみ

ゆえに道一入道なる探りかたの母れ流

山



土師の住い

ふれ命はまけ

むら

いん

いん



系にけり

味はあま

日はあま

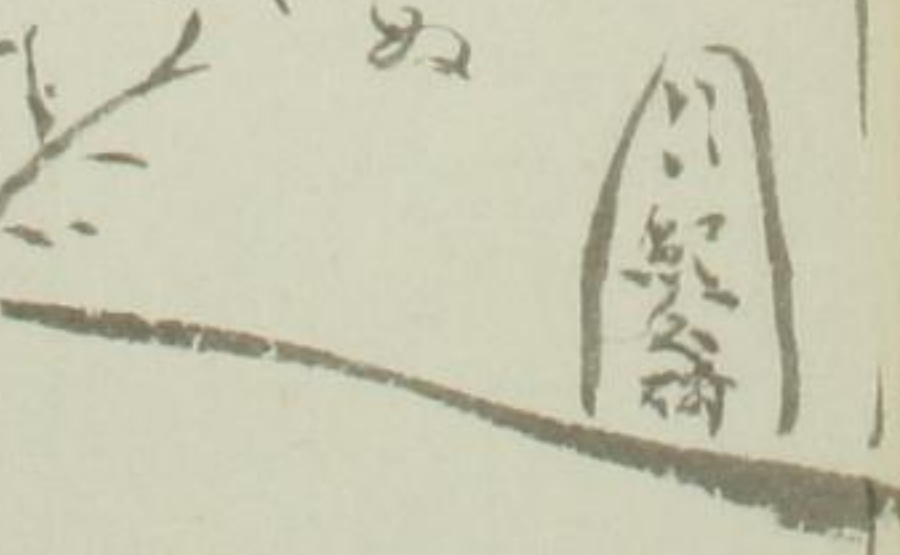
但しあま

たの

冊

川

いん



桃太郎重延のそふ



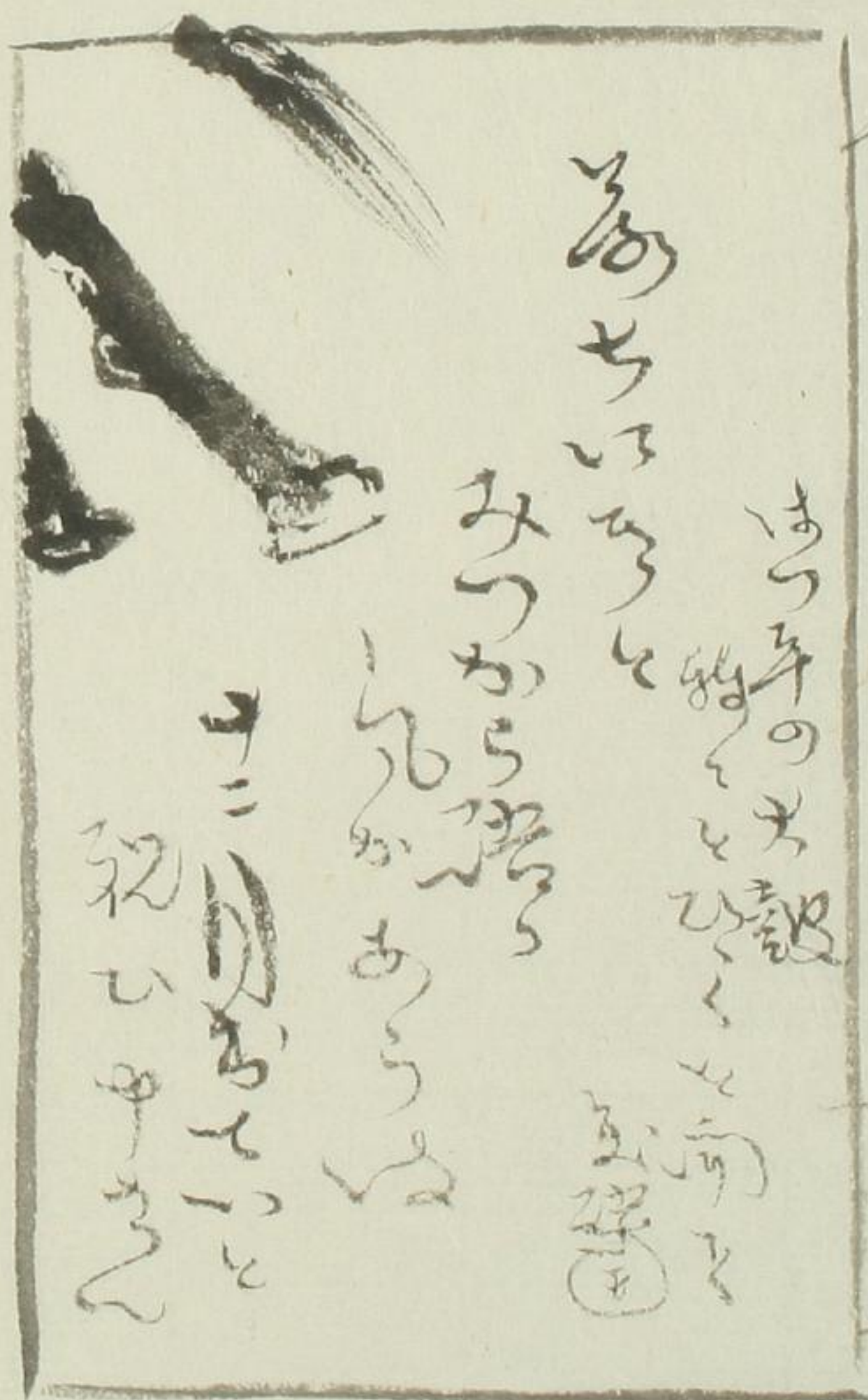
桃太郎

ひとに一人をもうか類人多し人
 若くは類多の三巻を特別に大書し
 所井原がモカト五十年前の角力古画
 巻物に
 帯巻の古画の巻物を
 古く画は
 明治二年
 杉田常晴の古画の巻物
 久留米の古画の巻物
 見うあひ
 田原の古画の巻物

日比野の古画の巻物
 杉田常晴の古画の巻物
 久留米の古画の巻物
 見うあひ
 田原の古画の巻物
 日比野の古画の巻物
 杉田常晴の古画の巻物
 久留米の古画の巻物
 見うあひ
 田原の古画の巻物
 日比野の古画の巻物
 杉田常晴の古画の巻物
 久留米の古画の巻物
 見うあひ
 田原の古画の巻物

の形も 刀はすくつかいをたてり 氣はさき
たれり せんきり せんきり せんきり
其の斬り落す所の葉をさきみしこい 葉のふしな
ふゆり せんきり せんきり せんきり
のふゆり せんきり せんきり せんきり

下の図
の解き
の解き



家成紀の如く 刀はすくつかいをたてり 氣はさき
たれり せんきり せんきり せんきり
其の斬り落す所の葉をさきみしこい 葉のふしな
ふゆり せんきり せんきり せんきり
のふゆり せんきり せんきり せんきり

共古日錄二十一

目九十八



送

Handwritten text in cursive script on a light-colored paper strip.

Handwritten text in cursive script on a green paper strip.



Handwritten text in cursive script on a light-colored paper strip.



Handwritten text in cursive script on a light-colored paper strip.

Handwritten text in cursive script on a light-colored paper strip.

